

梨木平遺跡

—第1次～第4次発掘調査の総括—

昭和61年9月



▲1. 4次・P.18 坑底の遺物出土の状況



▲2. 4次・P.8 投棄され子ピットに倒立で入りこんでいた土器破片



▲3. 4次・P.1 椁底を覆う第1次埋没土にのっていた遺物



▲4. 1次・P.13 椁内の埋没土上で投棄された遺物



5. 梨木平遺跡発掘の
土器個体

1	2
	3
	4
	5
	6

各土器の出土した遺構

1. 4次・P.18
2. 4次・P.2
3. 1次・P.6
4. 4次・P.1
5. 4次・1号土器ブロック
5. 4次・2号土器ブロック



6. 梨木平遺跡出土の土器個体展開写真

(小川忠博氏撮影, 提供による)



3次・P.22出土



1次・P.42出土



4次・2号土器ブロック出土

序 文

私たちの上河内村は、西に聳したたる山地、東に清流
鬼怒とそれが潤おす沃野に恵まれた自然の中にありま
す。この豊かな環境は古代の人々の暮しにも好適であっ
たためか縄文時代以来の遺跡が数多く存在しておりま
す。その中でも高松地内にある梨木平遺跡は眺望のよい
高台にあり、縄文土器や石器、土師器などが散布する古
代集落跡として知られ村民に親しまれてきた代表的な
遺跡であります。しかし時代の流れでこの遺跡にも開発
工事が及ぶところとなり、当教育委員会は昭和46年から
49年まで4回にわたる発掘調査を実施いたしました。そ
の結果、縄文中期の袋状土壇群と各種の遺物が発見さ
れ、学術上貴重な資料をもたらすことができました。こ
れらの内容については、先に調査概報等を公刊しており
ますが、個々の詳細な情報や成果の全体的な把握など
については必ずしも十分とはいえない状況にありました。

昭和54年度、「上河内村史」編さん事業が発足し、改め
て新史料の探査と既存史料の見直しとが始まり、上古代
の分野で梨木平遺跡の発掘成果は不可欠の資料として
再検討されることになりました。本書は、その作業のし
め括りとして、また従前の不足部分を補充することも含
めて発刊するものであります。発掘調査の実施以来、既
に10年余の歳月を経て技術、研究が大きく進んでおりま
す。昨今、既存資料に光をあてたこの小冊子が各方面にお
いて少しでも活用され文化財保護の一助となるよう
願って止みません。

昭和61年9月30日

上河内村教育委員会教育長 増 潤 益 三

例 言

1. 本書は、栃木県河内郡上河内村大字高松に所在する梨木平遺跡の第1次～4次発掘調査の成果を総括した報告書である。
2. 梨木平遺跡の発掘調査は、上河内村教育委員会を主体者とし次表の体制により実施された。

梨木平遺跡発掘調査体制

	第 1 次	第 2 次	第 3 次	第 4 次
調 査 主 体 者	上河内村教育委員会	上河内村教育委員会	上河内村教育委員会	上河内村教育委員会
調 査 期 間	昭46.7.26～8.11	昭47.8.21～9.4	昭49.3.16～3.29	昭49.7.29～8.29
予 算	700,000円(国補)	700,000円(国補)	350,000円(村単)	2,000,000円(国補)
発 掘 担 当 者	堀 静 夫 (作新学院高等部) 常 川 秀 夫 (県教委文化課)	堀 静 夫 (作新学院高等部) 常 川 秀 夫 (県教委文化課)	常 川 秀 夫 (県教委文化課)	海老原 郁 雄 (県立宇中女高) 常 川 秀 夫 (県教委文化課)
調 査 補 助	宇 郡 宮 大 学 考 古 学 研 究 会 (羽生友治 他9名)	宇 郡 宮 大 学 考 古 学 研 究 会 (斉藤一男 他4名)	宇 郡 宮 大 学 考 古 学 研 究 会 (島田 豊 他2名)	宇 郡 宮 大 学 考 古 学 研 究 会 (水品信男 他11名)
調 査 協 力	上河内村文化財調査 委員会 上河内中学校 高松地区婦人会	上河内村文化財調査 委員会 高松地区婦人会	上河内村文化財調査 委員会 高松地区婦人会	上河内村文化財調査 委員会 矢板中央高等学校 (鈴木 勝 教諭他) 高松地区婦人会
事 務 局	村 長 手塚 裕司 教 育 長 猪瀬 正男 (社会教育係) 係 長 古橋喜太郎 主 事 補 小林 力	村 長 手塚 裕司 教 育 長 猪瀬 正男 (社会教育係) 係 長 古橋喜太郎 主 事 補 小林 力 (総 務 係) 主 事 補 手塚 要	村 長 手塚 裕司 教 育 長 猪瀬 正男 (社会教育係) 係 長 古橋喜太郎 主 事 補 小林 力	村 長 手塚 裕司 教 育 長 猪瀬 正男 (社会教育係) 係 長 古橋喜太郎 主 事 補 小林 力 主 事 補 所 康夫

3. 出土遺物・記録写真・遺構図面等は、上河内村教育委員会が保管している。遺物の一部は村伝習施設・中央公民館に保管展示されている。
4. 本書の刊行は、当初、『上河内村史』編さんに係わる既存資料の見直し作業に基いて、村史資料集として発刊する計画であったものを変更し、改めて「上河内村発掘調査報告第6集」として行うものである。
5. 本書の執筆・編集は次の者が行った。
上河内村史専門委員・上古代部長 海老原都雄（現 県立宇都宮商業高等学校教諭）
6. 本書の作成に当たり、遺物の実面・図面のトレース等について特に、次の方々の協力を得た。
木村等・初山孝行・芹沢清八・篠崎勝彦・塚本節也・鈴木実・長谷川操
7. 土器個体の展開写真については、写真家小川忠博氏が撮影したのから同氏の許可を得て掲載するものである。

8. 事務局

上河内村教育委員会

教 育 長 増 岡 益 三

（社会教育課）

課 長 手塚 英弘

課長補佐 渡辺 千賀子

（前担当）

主 査 小林 茂

凡 例

1. 本書の構成において、1次・2次調査の遺構検出状況については調査担当の塩静夫・常川秀夫両氏撮影の写真を使用した。
2. 各遺構の名称は調査時の呼称に基いている。
3. 遺構実測図は、1次調査分は実測原因から、2次調査分は概報から転載（原因紛失のため）した。遺物実測図も一部を概報から転載した。
4. 遺構とその出土遺物について、検出状況・実測図・遺物等を一括し、同じ頁ないしは見開き頁に配備してある。
5. 遺構の説明記述は概報より要所を抽出し転載したが、検出状況については写真の補足説明を追記した。
6. 土器に付した番号は通し番号である。
7. 土器の考察については、その殆んどを『上河内村史』から当該部分（海老原執筆）を転載した。
8. 梨木平遺跡発掘調査の各年次の報告書は次のものであり、本書の記載は基盤をこれに置いている。

第1次調査 「梨木平遺跡」 栃木県河内郡上河内村梨木平遺跡概報（上河内村文化財調査報告書第1冊）昭和47年5月 上河内村教育委員会

第2次調査 「梨木平遺跡」 第二次栃木県河内郡上河内村梨木平遺跡調査概報（上河内村文化財調査報告書第2冊）昭和48年3月 上河内村教育委員会

第3・4次調査 「梨木平遺跡第4次調査報告書（縄文時代中期袋状土壌の研究）」（上河内村文化財調査報告書第3集）昭和50年3月 上河内村教育委員会

梨木平遺跡—第1次～第4次発掘調査の総括

写真／序文／例言／凡例

目次 本文目次／図版目次／写真目次

I 発掘調査の経緯	1
1. 行政対応の経過	1
2. 遺跡の立地と環境	14
II 発掘調査の概要	23
1. 第1次調査	23
2. 第2次調査	77
3. 第3・4次調査	123
III 発掘調査の総括	137
1. 袋状土壌の役割	137
(1) 袋状土壌の埋積土	138
(2) 堅果採取と土壌腐絶の実験から	142
(3) 土壌の累加現象	147
(4) 土壌の形態	154
(5) 土壌の投棄遺物	156
(6) 土壌の用途	158
(7) 群在性土壌と二段床住居	162
2. 群在性土壌の意義	167
(1) 「袋状」形態が意味するもの	167
(2) 「群在性」の意味するもの	168
(3) 盛行期と地域	170
3. 中期の土器	176
I期／II期／III期／IV期／V期	
参考文献	187
あとがき	

図 版 目 次

<p>1 図 梨木平遺跡地籍図</p> <p>2 図 梨木平遺跡位置図</p> <p>3 図 上河内村・縄文中期遺跡分布図</p> <p>4 図 第1次調査区検出遺構</p> <p>5 図 1次・P.1～3・P.19～22・P.33 ・P.36～37・P.43</p> <p>6 図 1次・P.3</p> <p>7 図 1次・P.5</p> <p>8 図 1次・P.9</p> <p>9 図 1次・P.4・P.28</p> <p>10 図 1次・P.6</p> <p>11 図 1次・P.7・P.8</p> <p>12 図 1次・P.11</p> <p>13 図 1次・P.13</p> <p>14 図 1次・P.14</p> <p>15 図 1次・P.15</p> <p>16 図 1次・P.16・P.33</p> <p>17 図 1次・P.17・P.27</p> <p>18 図 1次・P.18・P.26・P.38</p> <p>19 図 1次・P.35</p> <p>20 図 1次・P.23～25</p> <p>21 図 1次・P.39～40</p> <p>22 図 1次・P.41</p> <p>23 図 1次・P.42</p> <p>24 図 1次・土器(1)1～7</p> <p>25 図 1次・土器(2)8～16</p> <p>26 図 1次・土器(3)17～25</p> <p>27 図 1次・土器(4)26～39</p> <p>28 図 1次・土器(5)40～61</p> <p>29 図 1次・土器(6)62～85</p> <p>30 図 1次・土器(7)86～110</p> <p>31 図 1次・土器(8)111～124</p> <p>32 図 a 石器 b 1次・P.21土器</p> <p>33 図 第2次調査区検出遺構</p>	<p>34 図 C区炉址3基の出土状態</p> <p>35 図 2次・P.5</p> <p>36 図 2次・P.3</p> <p>37 図 2次・P.6</p> <p>38 図 2次・P.19-1・P.19-2・P.39</p> <p>39 図 2次・P.17・P.23</p> <p>40 図 2次・P.42</p> <p>41 図 2次・土器(1)125～132</p> <p>42 図 2次・土器(2)133～135</p> <p>43 図 2次・土器(3)136～139</p> <p>44 図 2次・土器(4)140～148・245</p> <p>45 図 2次・土器(5)149～177</p> <p>46 図 2次・土器(6)178～210</p> <p>47 図 2次・土器(7)211～227</p> <p>48 図 2次・土器(8)228～244</p> <p>49 図 2次・石器 第3・4次調査検出遺構</p> <p>50 図 4次・P.1実測図</p> <p>51 図 4次P.18実測図</p> <p>52 図 梨木平遺跡全区</p> <p>53 図 1次調査・土壌時期区分図</p> <p>54 図 2次調査・土壌時期区分図</p> <p>55 図 3・4次調査・土壌時期区分図</p> <p>56 図 梨木平遺跡検出の袋状土壌計数値相関 グラフ</p> <p>57 図 各時期の袋状土壌</p> <p>58 図 有段式竈穴遺構検出遺跡</p> <p>59 図 鳩岡崎遺跡・時期別遺構配置図</p> <p>60 図 I期の土器</p> <p>61 図 II期の土器</p> <p>62 図 III期の土器(1)</p> <p>63 図 III期の土器(2)</p> <p>64 図 IV・V期の土器</p>
---	--

写真目次

- | | |
|---------------------|-----------------|
| 巻頭写真 | 1. 梨木平遺跡近景 |
| 1. 4次・P.18 | 2. 梨木平遺跡全景 |
| 2. 4次・P.8 | 3. ～37. (35頁分) |
| 3. 4次・P.1 | 第1次調査・遺構と遺物 |
| 4. 1次・P.13 | 38. ～62. (25頁分) |
| 5. 梨木平遺跡発掘の土器個体 | 第2次調査・遺構と遺物 |
| 6. 梨木平遺跡出土の土器個体展開写真 | 63. ～73. (11頁分) |
| | 第3・4次調査・遺構と遺物 |
| | 74. 各期の土器 |

表目次

- | | |
|-----|------------------------|
| 1表 | 第1次調査予算書 |
| 2表 | 第2次調査予算書 |
| 3表 | 第3次調査予算書 |
| 4表 | 第4次調査予算書 |
| 5表 | 上河内村・縄文中期遺跡地名表 |
| 6表 | 第1次調査検出の袋状土壌概要表 |
| 7表 | 第1次調査掲載土器摘要 |
| 8表 | 第2次調査検出の袋状土壌概要表 |
| 9表 | 第2次調査掲載土器摘要 |
| 10表 | 第4次調査検出の袋状土壌の概要表 |
| 11表 | 梨木平遺跡：実験用土壌の概要表 |
| 12表 | 梨木平遺跡検出土壌の時期別個数表 |
| 13表 | 梨木平遺跡土壌規模の相関表 |
| 14表 | 栃木県：大量の土器個体が出土した土
壌 |
| 15表 | 関東地方の二段床住居検出遺跡 |
| 16表 | 関東地方の二段床住居事例 |
| 17表 | 梨木平遺跡：土器の編年位置 |

I 発掘調査の経緯

1 行政対応の経過

梨木平遺跡の発掘調査は、昭和46年度から49年度までの4年間に4次にわたって実施された。上河内村教育委員会が発掘主体者となって実施した最初の調査である。前年1月と7月、8月には東北自動車道の村内路線域にある山口遺跡及び城山遺跡・沖ノ下遺跡の発掘が行われており、村は大型プロジェクトに伴う「行政発掘」の「洗礼」を受けているが、梨木平遺跡の発掘はこれに次ぐもので、行政上やむを得ず対応する緊急調査であった。高度経済成長の後業に当たるこの時期、日本列島に押し寄せた土工事の奔流はこの小さな村をも例外とはせず、村教委は未経験の「行政発掘」に取り組むことになった。

土工事の着手によって遺物が出土し、遺跡と確認されたので保護側の行政機関（多くは、地方公共団体）が慌てて工事停止を要請、工事で滅失する部分の発掘調査を行う——という事態が当時は少なかった。梨木平遺跡の場合もまたその例外ではなかった。

昭和45年度、栃木県は農林省から国費65%の補助を受けて上河内村小倉地内の水田造成工事「西鬼怒農用地開発」の主体者となり、村と共に5ヵ年計画で事業を開始した。その土工事で、客土する土を梨木平遺跡から削取することとし、遺跡西側を南北に通る村道の側から用地買収し畑地4.7haの土取りを行うというものである。土取り工事は、昭和45年7月から始められ、遺跡南西部分が大きく抉られていった。地番では高松516・520～522番地他にそれに当たり、1次～4次発掘調査で調査対象とした面積（予定面積を全部発掘できなかった）と同じ位の広さに当たる。その内でも、522番地は、2次調査で住居址群を検出した523番地の西隣にあり住居址群の本体が存在していた可能性が強い。梨木平遺跡は『栃木県遺跡目録集成』（昭43・3刊、栃木県教育委員会）に通番号1244、上河内村番号36として記載されている周知の遺跡であり、「現在、全部畑地となっているが、以前から矢の根石や土器の破片などが無数に出土しており、計画的な発掘が待望された」（1次調査概報、教育長序文）遺跡であっただけに、事前協議を経ないこの土工事はまさに遺跡の一語に尽きる。

工事が進行するうち、ブルドーザーの作業中に工事監督者（県営土地改良西鬼怒地区）が縄土器の壺を発見、このことが村教委に通報されて初めて遺跡取扱いの問題が俎上にのぼった。8月、村教委は土取り工事中止を要請し県教委文化財保護課と善後策を協議した。土取り工事は中断され、遺跡部分の発掘調査を終了した後には再開するという結論になったが、既に地権者が代金を受領している部分については土取りが行われたのであった。その後の担当部局の協議によ

り、これ以上の土取りは行われぬことに決定したため、発掘調査済みの部分も含めて遺跡は保存されるに至っている。

県教委との協議では、土取り予定地区について、経費の国庫補助を受けて来年から2年継続事業として緊急発掘を行う。調査主体者は村教委とし、発掘担当者については県教委が手当てする、というものである。

年度後半、国庫補助金を申請する準備を村教委は進めた。当時、村教委は全体で一課二係の扱いで、担当部門は社会教育係。古橋喜太郎係長（昭61. 3 村総務課長を定年退職）の下で、まだ若年だった小林力主事補（昭61年度、村経済課共済係長）が文書起案から多様な連絡調整にわたる事務をこなした。国庫支出の科目は『文化財保存事業にかかる国庫補助金』の中の〈埋蔵文化財緊急調査〉費。調査を行う昭46、47年度とも70万円ずつで総経費140万円。国庫の補助率は50％で、国庫補助がついた場合は残りの50％のうち半分を県が補助してくれる。つまり村費では全体の25％を負担すればよい。46年の年頭に、県教委へ調査計画書（経費予算書と調査計画の概要を添付）を提出、東京で文化庁記念物課のヒアリングが行なわれ、経費補助が内定した。

第1次調査

昭和46年4月は、村教委社会教育係にとって殊に多忙な新年度の幕あけであった。例年の〈青年学級〉〈婦人学級〉等の計画、県教委との連絡調整（鉄砲刀剣、保存修理「関白獅子舞」、民俗調査等々）、村文化財調査委員会等関係機関の運営取り、などをはじめ年度当初の事務処理に加え、栗水平遺跡発掘調査の準備に着手せねばならなかったせいである。寡勢で、多様な事務分掌を消化するために町村職員は土日出勤を余儀なくされることが珍しくない。社会教育の事業内容に関連して休日行事をもつことが多いので社会教育係には特にその傾向が強いのは昨今変わらない。

昭和46年4月1日、県教委文化財保護課は「文化課」と改称した。それは、より広範で総合的な文化行政への転換であったが、東北新幹線計画の急速な進捗など大規模開発が目白押しの際、埋蔵文化財保護はいっそう困難な局面に立たされる中で「保護」の名称を取り去ることへの議論もあり、「文化財保護課」を踏襲した他県の例も少くない。

ともあれ「文化課」は3係制で発足した。埋蔵文化財担当は文化財調査係で、係長（大和久震平）・嘱託3（県立高教員出向）・調査員2（臨時職員）・補助員1（アルバイト）の構成、別に郷土資料館付で主事・公仕各1・調査員2が加わっていた。県教委が毎年年度当初に行う〈市町村文化担当者会議〉では、この時『文化と文化行政』のテーマにより“文化”の用語について特説している。

村教委の発掘準備は、4月まず県教委からの指導係官の派遣申請に始まっている。調査係の竹沢謙・常川秀夫主事兼指導主事、文化財保護調査委員の市場伝一委員長らとの協議により、

①発掘は9月23日から14日間実施する
②字大学生を測量等業務のため任用する
(日当は人夫と同じ1,500円)
などを決定。

その後の経過は右記の通りであるが、開発行為に伴う所謂「行政発掘」の体裁が整い、梨木平遺跡の発掘が「事務屋」のルートによって進行していった状況がよく分かる。予算も専門職員もない町村が、開発に急がれる遺跡発掘に保護行政の立場からどう取り組むのか。(一に先例、二に予算、三四が無くて五が根拠)とは公務員世界の慣行をいい表わして妙なものがあるが、村教委にとってその「先例」をどうパターン化するかが問題の初年度であった。6月、調査担当者は県教委から大和久・常川、外部委嘱で埴静夫(作新学院教諭)と決定、調査補助に村文化財調査委員が当たることになった。これで体制ができたわけである。

発掘は(緊急調査)として継続2年の国庫補助事業として行う。総額140万円のうち村は4分の1の35万を負担すればよい。専門職員は県教委からの派遣と外部委嘱で手当てする。技術補助には宇大の学生を当てる。このシステムが「先例」として第4次調査まで継続することになる。市町村教委が主体となる発掘調査に県教委が専門職員を派遣する方式は昭和40年ごろから50年度まで続くが、県で埋文センター設置構想が具体化し始めた昭和51年度から停止された。県の仕事量が増えたので人を増やそうとするのに、外部に派遣する余裕があっては矛盾するし、事実この時期からはその余裕がなくなった。もう1つは、市町村が県に頼らず自立すること、つまり独自に専門職員を採用して行政発掘に対応できる体制を整えるように仕向けるためであった。小山市、次いで宇都宮市などがその関係の職員を採り始めたのが、昭和50年度以降のことで、梨木平遺跡の発掘は「市町村オタスケマン」時代の盛期に当たるといえる。

梨木平遺跡の発掘経費は、なぜか「保護側」が緊急調査費を経上して対応する(保護側全面負担)になっている。西鬼怒パイロット事業の着手時に、周知遺跡の土取りを事前協議抜きで始めたのは、今から見れば「文化財保護法」違反であり、遺跡破壊を許した保護側の村教委のミスである。文化財保護法で、埋蔵文化財発掘(この場合は開発者の土工事)について事前協議の義務づけ

昭和46年度・梨木平遺跡調査の経過

46. 4. 13 国庫補助金の内定通知(県教委)
4. 22 発掘準備等の打合せ(県教委と)
5. 27 次年度補助事業の照会(県教委)
6. 15 村文化財調査委員会の打合せ
6. 28 国庫補助金交付の申請書提出
調査担当者・補助員の名簿確定
7. 22 調査地区地権者宛に発掘実施通知
7. 23 県教委宛に調査担当者の派遣申請
7. 26 発掘開始(第1次発掘と呼称)
8. 11 発掘終了
9. 3 発掘地区の埋め戻し作業
埋蔵文化財発見届の提出
47. 1. 21 第2次発掘国庫補助申請の計画書提出
3. 10 第1次発掘実績報告書の提出

1表 第1次調査予算（昭和46年度）

区 分	摘 要	員 数	単 価	金 額	備 考
製木平発掘調査費				700,000	
1. 賃 金				371,000	
	発掘人夫費	224人	1,500	336,000	16人×14日
	出土品整理人夫賃	35人	1,000	35,000	
2. 報 償 費				27,000	
	調査員謝金	14人	1,000	14,000	1日1人×14日分
	調査協力者謝金	20人	650	13,000	
3. 旅 費				69,968	
	(イ)調査指導員普通旅費	14回	882	12,348	日当交通費
	(ロ) " 宿泊旅費	14夜	3,230	45,220	宿泊と日当ふくむ
	(ハ)文化財調査器具及び職員運送旅費	20人	500	10,000	
	(ニ)同上交通実費	20人	120	2,400	バス代
4. 需 用 費				102,000	
	(イ)消耗品費			19,200	
	フィルム（白黒）	20本	160	3,200	36枚用
	"（カラー）	10本	360	3,600	20枚用
	"（リバーサル）	5本	430	2,150	"
	写真用バルブ	5箱	250	1,250	5箱入
	文具類			5,000	鉛筆・インク他
	用紙類			4,000	
	(ロ)食糧費			6,500	
	調査打合せ会	12人	250	3,000	
	調査中間検討会	6人	250	1,500	
	資料作成会議	8人	250	2,000	
	(ハ)燃料費			5,300	
	ガソリン	100	53	5,300	
	(ニ)印刷製本費			71,000	
	報告書作成費	200冊	300	60,000	
	写真現象焼付			11,000	
5. 役 務 費				3,432	
	(イ)通信運搬費			3,432	
	運搬費		1,000	1,000	
	通信費		2,433	2,432	
6. 借料及び損料				63,600	
	(イ)発掘用機械借料			63,600	
	ベルトコンベアー	2×14	1,200	33,600	
	ブルトザー	1×2	15,000	30,000	
7. 補 償 費				63,000	
	(イ)作物補償			63,000	
	陸 箱	30アール	2,100	63,000	
計				700,000	



1. 豊平区農産地帯 荒川4次調査区を西から見る。手前は河川、上は区道R39号

が規定されるのは昭和50年7月の第4次改正においてであった。調査経費の原因者負担の原則についても昭和39年の閣議了解に基づく開発関係機関との連絡強化が存在していたのだが、この点での協議が行われた様子もない。昭和48年5月、県教委は「各種開発にともなう埋蔵文化財包蔵地の破壊等調査について」の文書を各市町村教委宛に出し、管下の実態報告を依頼している。遺跡破壊の頻度の高さを哀書するもので、埋蔵文化財の保護はまだ混乱の時代にあったといえるかも知れない。

梨木平遺跡第1次発掘は、上記のような埋文保護の動きを背景として行われたのであった。村教委が文化庁に提出した調査計画書の備考欄には、「発掘調査により、遺跡と確認できればその時点で、村費をもって保存計画と対策をする」とある。この遺跡破壊において、開発側から経費供与を受けなかった村教委の、発掘以後への意思の表われと見るのはうがち過ぎた推察であろうか。

第2次調査

昭和47年5月、この年度の「埋蔵文化財緊急調査」国庫補助の対象額70万円について内定通知が届き第2次調査が成立した。1次調査の成果により地権者の理解も得られた。前年の*先例に基いて第2次をうてばよかった。ところが、第1次着手時には予想しなかった事態が起った。発掘してからの第1次調査地区での遺構の密集ぶり（袋状土壇42基）から見て、第2次の対象面積と発掘期間とを見込むと、第1次と同規模の予算70万円では及びもつかないのである。「第1次調査の数倍の規模で調査する必要」（常川秀夫、第4次報告書）を感じたのは、既に申請手続きが済んでのことであったようだ。

発掘したのは、昭和47年8月21日～9月4日。予定地区は、第1次で発掘した約500㎡（471・472番地）に隣接する部分で、その北側の畑地。西から東へ470・473・(475)・476、及びその列の北側の464番地、もう1ヶ所は第1次調査区の南東角に接する513番地（地権者の発掘承諾書あり）がそれである。実際に発掘したのは、第1次調査区に東隣する474番地、南隣する523番地の一部、513番地の一部である。第2次調査3ヶ所約600㎡のうち、474番地には計5本のトレンチを縦横に並べその間も掘取して全体で約500㎡＝A地区、513番地には2×40mのトレンチ＝B地区、523番地にはグリッド掘り約60㎡＝C地区、となっている。つまり、事務局村教委が第2次調査を必要としたのは第1次調査区に隣接する北側部分であったが、実際の第2次調査は予定外の474番地を主体に実施された。それは「第1次調査で確認された袋状土壇群の東の範囲を確認するため」（常川、第4次報告書）という。概報によると、9/1には「C地区を設け、グリッド方式によって発掘を進める」とあるのに、同日にB地区では「最初P.40としたところは土師期の住居跡であることが判明したが、時間の都合でこれを放棄した」という。時間がないのに、予定外のC

1 図 製木平遺跡地籍図



地区=523番地を坪掘りし、一方では確認された遺構の完掘を放棄している。加えて、住居址が重複していたC地区は9/4「第3次調査に期待し、完掘することなく埋めもどし」してしまった。

調査後の遺物整理と概報の作成は第1次調査の場合と同様、発掘に参加した宇大考古学研究会学生（3年生中心）らにより進められたが途中で顛倒をきたし完了が遅れた。この時期以後、遺構実測の原因は紛失した。後年、宇大の資料箱から全測図だけが見つかったが、実測図は失われ今に至っている。

この間、開発側との協議で遺跡地からの土取りは今後中止されることになった。記録保存の発掘。その後の土取りという手順が、1次・2次調査とも行われなかったのはそのためである。それにも拘らず村教委が第3次調査を予定したのは、多くの地権者が客土用の土として売りたいとする希望が強かったからだ。いずれ発掘調査が必要になる箇所なので、〈出る〉ところからクリアーしておくという理由であったのか。第2次調査の予定面積は2,970㎡。実績面積はその5分の1程度で、予算も調査期間もそれに見合わないものであった。この反省に立って第3次調査

2表 第2次調査予算（昭和47年度）

区 分	摘 要	員 数	単 価	金 額	備 考
1. 賃 金				353,000	
	発掘人夫賃	214	1,500	321,000	
	出土品整理賃金	32	1,000	32,000	学生アルバイト
2. 報 償 費				115,800	
	専門調査員謝金	28	3,500	98,000	
	調査協力者謝金	14	700	9,800	村内者
	#	2	4,000	8,000	用具施設提供者
3. 旅 費				15,500	
	村内旅費	16	100	1,600	
	村外旅費	6	800	4,800	
	#	13	700	9,100	
4. 需 用 費				179,551	
(1) 消耗品費				22,591	
	メージャー・用紙	一式	10,391	10,391	
	写真フィルム、黒白	20	150	3,000	
	フィルム現像、黒白	10	420	4,200	
	フィルム現像、黒白	20	150	3,000	
	フィルム現像、黒白	10	200	2,000	
(2) 燃 料 費				4,660	
	車の燃料代（軽油）	120	33	3,960	
	LPG（プロパン）	1	700	700	
(3) 印刷製本費	印刷費			140,000	報告書
	印刷製本費	350	400	140,000	
(4) 食 糧 費				12,300	
	調査協力者昼食	5	140	700	
	お茶菓子代		1,200	1,200	
	発掘打ち合わせ食糧費	4	140	1,340	
	専門調査員行調査委員合同研究会	6	130	780	
	専門調査員行調査委員合同研究会	15	140	2,100	
	専門調査員行調査委員合同研究会	15	464	6,960	
5. 役 務 費				1,000	
	通 信 費			1,000	電話
6. 使 用 料				11,000	
	賃 借 料	1	11,000	11,000	ブルトーザー借用
7. 補 償 費				44,000	
	作目補償			44,000	陸稻、野菜
計				719,851	

は、予定面積を1000㎡、予算は倍額の150万円で立案された。第1・2次調査で埋蔵文化財の地元周知は徹底し、土取り売却は発掘をクリアーしてからという点は地権者の了解を得られたが、依

然として遺跡発掘の緊急度は高かった。〈原因者負担〉原則がよく浸透していなかったので、村教委は経費保護側負担で対応したが、これが支えで一夏半月の悠長な継続発掘が成立した。それに付けても、40基余の縄文遺構の密集区をたかだか15日で掘ってしまう何という〈荒業〉であったことか。

第3次調査

この調査の予定地区は、第2次調査で住居址を検出したC地区をL字状にとりまく523・513番地であった。昭和48年度国庫補助事業「国宝重要文化財等保存整備」のうち〈埋蔵文化財発掘調査費〉150万円の申請を、村教委は昭48.1.18付で行った。ところが国庫補助は却下された。当初2ヵ年計画の緊急調査が3年目にずれ込むのは、〈緊急〉度からみて筋がおかしいといふものである。前述の事情で発掘の全面停止もできない。そこで前年度半額の35万円村費負担により、第2次調査で未掘となっている〈C地区部分〉=523番地の一角を発掘することになった。担当係の実施伺書の日付は昭48.2.8付。名目は、昭和49年度に改めて国庫補助によって実施する第3次調査に先立つ〈事前調査〉で、遺構の種類・規模を確認し「第3次発掘の予算獲得の資料とする」といふもの。

この発掘は、昭和49年3月16日～29日に実質10日間、県教委常川秀夫・橋本澄朗指導主事の出席を得て行われ、結局「第3次調査」と呼称された。第3次調査の概要は公開されていない。その一部が〈第4次調査報告書〉に記載（常川）されているのと、村教委の公文書庫にある「作業日記」とから経過を見てみる。3/16～18=住居跡「掘り起」と発掘、A.1・3、B.2、C.1の各グリッドを発掘。〈C地区〉北側には多くの袋状土壌があることが判明。住居跡は「崩れやすい今市軽石層中に構築されているため明確に規模を把握できないが、埋壘を伴う住居は平面プランは楕円形で壁の周囲に並ぶ支柱穴から推測すると、4m×4.5m位の規模と思われる。この住居址をひとまわり拡張し床面も高くし、石囲炉を設けた拡張住居址があり、規模は4.9×5.1mであった」。3/23はDグリッドの発掘、D.5から土器発見、とあり以降3/29まで降雪の中止2日を挟んで図取り。第4次調査報告書に「P-22」の扱いで掲載した土壌は、3/16の欄に「A.3からピット、土器形のすぐれたもの発見」とあるのがそれ。概要は「南北が190cm・東西が164cm・深さ58cm。壁面崩落はかなり甚しいが、下位壁面には「袋状」の名残りをとどめオーバーハングしている。床面ウキで土器個体が出土」。

村教委の担当係は、昭49.3.30付で発掘終了報告をした。経費精算額335,340円、対象面積は250㎡。前回調査の〈C地区〉を追発掘したもので、次に予定する調査区の子備発掘はきわめて曖昧裡に終了した。前述「P-22」を除いて成果の公表はなく、調査時の遺物の一部・実測図等も行方不明である。第2次調査の図面も含めて、遺物・図面等の考古学上の事項は発掘関係者に任

3表 第3次調査予算（昭和48年度）

区 分	摘 要	員 数	単 価	金 額	備 考
1. 賃 金				235,000	
	発掘人夫賃 10×10日	100人	2,100	210,000	
	出土品整理人夫賃	10人	2,500	25,000	宇大アルバイト生
2. 報 償 費				30,000	
	調査指導謝金	10人	3,000	30,000	村内職員
3. 旅 費				5,500	
	発掘従事者旅費	17回	100	1,700	事務局職員
	文化財調査委員旅費	20回	100	2,000	調査委員
	事務連絡旅費	2回	900	1,800	
4. 需 用 費				43,000	
	食糧費	100	50	5,000	
	消耗品費			5,000	
	燃料費			3,000	
	印刷製本費	100部	300	30,000	保存資料代
5. 役 務 費				4,000	
	通信、運搬費			1,000	
	出土品格納、保管			3,000	
6. 借料、補償補てん				48,000	
	ブルドーザー	2	14,000	28,000	
	発掘補償費	250㎡	80	20,000	稲作、作物補償
合 計			365,500		

せたまま事後の保存管理が不徹底であった。そのため折角かけた時間と経費が充分に生かされないばかりか、徒らに遺跡破壊を進めたとする誇りも受けかねない結果になっている。

第4次調査

昭和49年度の国庫補助事業で埋蔵文化財発掘調査が決定したのは県内では次の3遺跡である。

上河内村 梨木平遺跡 2,000千円

芳賀町 谷近台遺跡 1,200千円

市貝町 石下古墳群 500千円

梨木平遺跡第4次調査は、文化財調査費2,000千円のうち、文化庁から1,000千円、県から500千円、村から500千円の計2,000千円で実施となったが、村費持出し8,655円があり精算額は、2,058,655円であった。

この調査も、例年通り県教委常川秀夫指導主事の派遣を得たが、従前まで主任調査員であった

4表 第4次調査予算（昭和49年度）

※国庫補助発掘としては3次

区 分	摘 要	員 数	単 価	金 額	備 考	
調 査	諸 謝 金	調査委員謝金	20人	3,000	60,000	村外職員
		計			60,000	
	調 査 委 員 等 旅 費	調査旅費	20人	3,000	60,000	
		免職人実費	10人	1,000	10,000	
	賃 金	調査補助員 1日 2人×20日	40人	2,300	920,000	
		調査補助員 1日 2人×20日	40人	2,500	100,000	
		出土品整理	30人	2,000	60,000	
		計			1,150,000	
	需 用 費	フィルム、鉛筆、ポリ メチレン袋等			12,000	
		報告書	300部	2,000	600,000	
発掘用具				5,000		
役 務 費	出土品保管			5,000		
	出土品運搬			3,000		
	使用料及賃借料	ブルドーザー(小型)			50,000	
補 償 費	発掘補償費	2,000㎡	40	80,000		
	計			755,000		

事 務 局 費	旅 費	事務局旅費	20	800	16,000
		工事監督等旅費	18	1,000	18,000
		計			34,000
	役 務 費	郵便料、電話料			1,000
	小 計			35,000	
	合 計			2,000,000	

廣静夫作新学院教諭が〈谷近台遺跡〉の発掘を引きうけたため要員を更新、海老原郁雄（県立宇都宮中央女子高教諭）が代ることになった。

発掘は、昭和49年7月30～8月29日の盆休みを除く27日間実施。調査対象は、第3次調査区を鏡手状に囲む523番地の北側と、その東側513番地。実際には鏡手状の東側部分だけを発掘、北側部分には手がつかず、全体で約1,010㎡ほどであった。結局、住居址は検出できず4次にわたる発掘では523番地の一角に3軒ほどの重複部分だけが確認されたことになる。これに隣接した既壊土取り地区に住居地区があったのだろう。

この調査では、袋状土壌の壁面崩落と充填土との因果関係、充填土と竈内遺物との相互関係等を観察するため、土壌自体を縦に切断して発掘する方法を併用した。それにより、充填土の時間差の識別、遺物の共存関係とくに一括放棄の在り方などの把握に成果を上げた。以降、遺物の整理、図面の作成、原稿執筆に約1年を要し、翌年夏に「第4次調査報告書」が公刊されて調査は

終了した。

梨木平遺跡の発掘調査は、行政機関が主体となり昭和46年度から昭和49年度までの4年次わたる継続事業で、総経費約3750千円で実施された。出土遺物、記録写真・実測図等は、一部を除いて村教委が集中保管している。必ずしも十分な発掘調査とは言えないが、保護側負担の経費で対応し、途上の協議により既発掘地区も保存され広域にわたる未掘地域と共に現在に至っている。昭和54年度、県教委は「重要遺跡資料整備事業」に伴い県指定に準ずる重要遺跡に選定した。この時期、相次ぐ宅地造成、ゴルフ場建設などから大型プロジェクトの東北新幹線建設などに至るまで乱開発ともいえる土工事が数多くの遺跡を滅失させていった。〈いま生きている人間〉の利益を優先する開発の趨勢に、¹「衆寡敵せず。記録保存の名の下に、それすらも不十分なままに消えていった遺跡も少なくない。それを思えば梨木平遺跡は、まだましな運が良い方の部類なのかも知れない。村教委の当該年次の公文書欄を見ても調査を段取りし関係機関との接渉した経緯は分らない。しかし、無味乾燥に見える文書の断続を眺めるとき、その狭間にこの事業を進めてきた²担当事務屋。たちの熱い思いを見る思いがする。

I 発掘調査の経緯

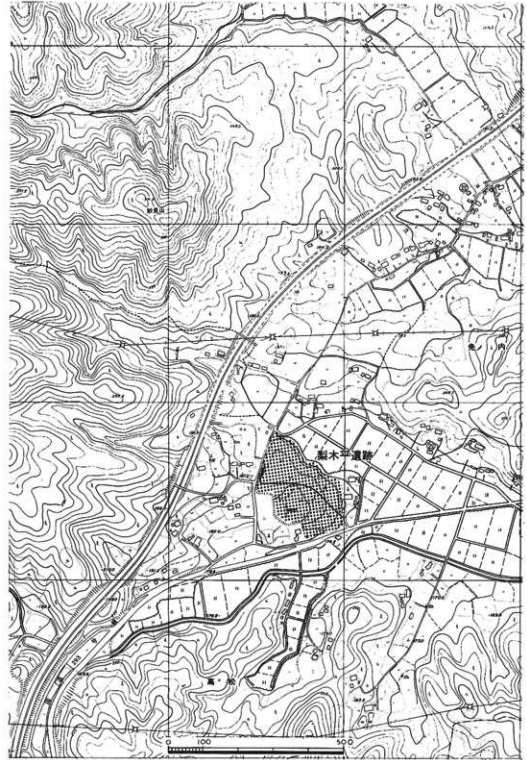
2 遺跡の立地と環境

上河内村の遺跡は、その大多数が村西域の山地に集中している。山地の東麓を西鬼怒川が、中央部を山田川が開折し、微地形上の独立台地や高台・緩斜面などをつくり出し遺跡立地の好条件をなしている。この遺跡ゾーンのうち、梨木平遺跡は高館山（標高476.7m）の東裾にある丘陵の一つに立地した縄文前期・中期及び歴史時代の集落跡で、中世城館跡も重複している。当遺跡が立地する丘陵は、両側を狭い谷（低地）に囲まれ東へのびた舌状台地で、その舌端部に集落跡は位置している。丘陵のつけ根に当たる部位を東北自動車道に切断され、遺跡の西側限界に近い部位を村道に切断され、また南縁に沿って国道293号線が通っている。従って、遺跡は台状の島のよ様な独立地形を呈し、平面積で約25,000㎡の広さをもつ。外周部を土取りや道路拡幅などの土工事で削取されているので、実際には30,000㎡以上の遺跡範囲が想定されている。

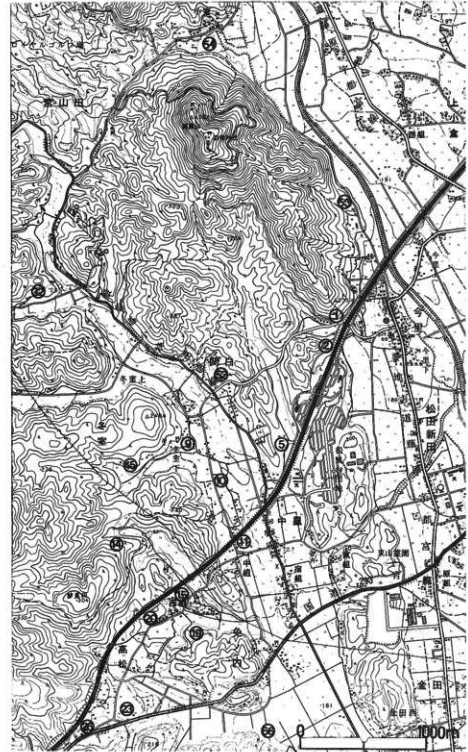
遺跡地面は、南側に局所的な高みがあり、北側がやや低く緩傾斜しており、標高約180mで周囲の低地（水田）から比高約10m、見るからに中期集落の典型立地の相を備えている。

梨木平遺跡を含む遺跡ゾーンは、山地と平地との接触地域に占地している。とりわけ縄文時代の遺跡は、山地を切り裂いて南流する山田川とその支谷とがつくった谷底低地に面する立地が多い。梨木平遺跡の近隣には、北側の低地を隔てて梨木平北遺跡（村周知№21。縄文早・前期、奈良平安）、堂向遺跡（同№20。縄文中・後期、奈良平安）、また、南側の低地を隔てて後久保遺跡（同№22。縄文）、その低地の東方の下手に神田前遺跡（同№66。縄文中期）、など縄文時代集落跡が点在している。

縄文中期の遺物を出土する遺跡は、村周知67遺跡のうち16遺跡で、縄文時代45遺跡の約3分の1を占める。これら中期遺跡の时期的な位置づけ、存続期間、遺跡規模などについては別途の調査を要するが、局所的な山地東麓の分布であるので大小遺跡の时期的な共存などをふまえ、梨木平遺跡の相対的な在り方を検討する素材となろう。梨木平遺跡から北西北に直線約3.6km離れた橋場遺跡（同№32.）、同様にほぼ北へ直線約5.3km離れた宮前遺跡（同№54）は、これら中期遺跡群の中でも、広い平坦面をもつ独立的な舌状台地に立地し、梨木平遺跡と共通点が多い。これら三遺跡は長期的な定住形集落の様相を示す点で、生業圏との保わりに関与する遺跡群の組合せ（小林達雄氏によるセトルメントパターン）の在り方を考える上に今後の踏査を要するものと思われる。



2 図 梨木平遺跡位置図 (1マスの一辺は600m)



3 図 上河内村・縄文中期遺跡分布図（数字は村周知ナンバー）

5表 上河内村・縄文中期遺跡地名表

(昭和58. 7. 現在)

番号	遺跡名	時期	立地・所在地
1	高尾前	縄(中・後) 奈良 平安	丘 麓・今里高尾前
2	山向	縄(早~中) 平安	丘 麓・今里山向
5	南山	縄(中・後) 古墳	段 丘・関白南山
9	水無	縄(中) 奈良 平安	段 丘・冬室水無
10	冬室	縄(中) 奈良 平安	段 丘・冬室水無
11	西保所前	縄(中) 奈良 平安	段 丘・中里免の内
14	西山	縄(早~後)	丘 麓・中里西山
15	神の下	縄(中) 奈良 平安	低丘 麓・中里神の下
19	向山	縄(早~後) 奈良 平安	台地・中里向山
20	堂向	縄(中・後) 奈良 平安	丘 麓・免の内堂向
23	梨木平	縄(前・中) 奈良 中世	台地・高松梨木平
26	カワラケ	縄(中) 奈良 平安	台地・高松カワラケ
32	橋場	縄(中)	段 丘・宮山田橋場
45	西山	縄(中) 奈良 平安	山 麓・冬室
52	関白北	縄(中)	山 麓・関白
53	古宿	縄(中・後) 奈良 平安	山 麓・今里古宿
54	宮前	縄(中)	台地・宮山田小室
66	神田	縄(中)	低台地・高松

〔「上河内村の遺跡」昭58. 10村教委刊による〕



2. 1974年10月撮影。岡山県から、岡山中央の中心部まで、上には岡山県道、中央部には国道26号

Ⅱ 発掘調査の概要

1. 第1次調査
2. 第2次調査
3. 第3・4次調査

Ⅱ 発掘調査の概要

1. 第1次調査

第1次調査は、堀静夫（主任）・常川秀夫（副主任）氏の担当により、昭和46年7月26日～8月11日まで実施された。その概要は、上河内村文化財調査報告書第1冊「梨木平遺跡」（概報）に記載されているが、その中から、〈調査経過〉・〈袋状土壌〉の要項一覧表を転載する。再検の結果、土壌の検出数は42基で、以下に記載する各土壌の名称は本調査の呼称に基いている。

調査経過

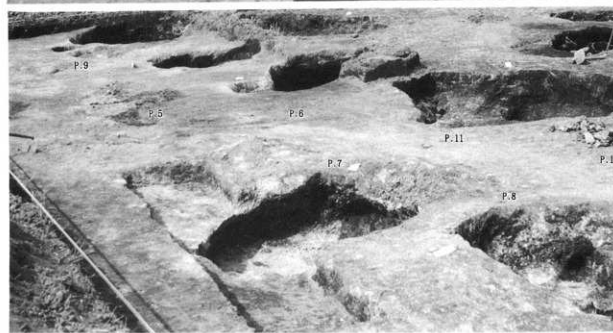
発掘調査は昭和46年7月26日より8月11日まで実施した。

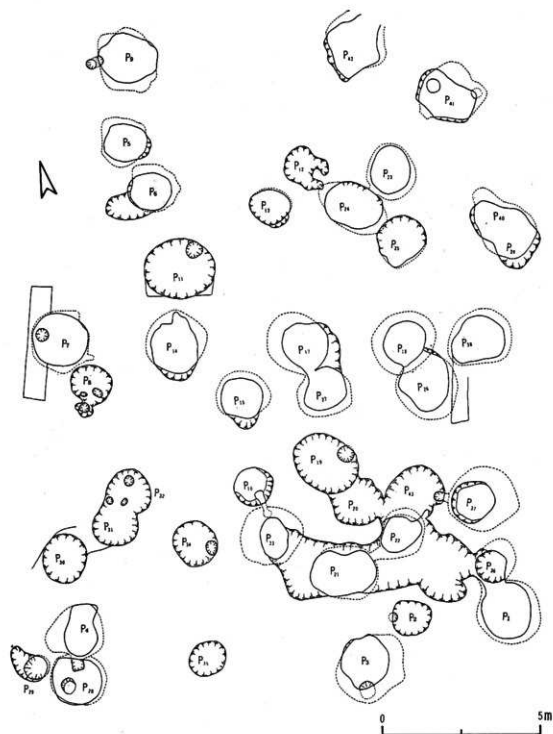
遺跡の規模が可成り広大であるため、舌状台地の突端部に近い南面する地点と遺物の比較的多く散布する地点で休耕地になっている北西端部の二地点を調査した。台地突端部に近い地点は遺物の出土量が僅少で、しかも腐植土（耕作土）が残約20cm前後で今市軽石層に達し、今市軽石層面上には何らの遺構も発見されなかったため調査を中止し、北西端部地点の調査に主力をおいて発掘を進めた。縄文中期遺跡においては、屢々袋状土壌が発見されるため、腐植土の全面除去の作業を行ない、この結果今市軽石層中に腐植土の円形を呈した個所が随所にみられ、袋状土壌の存在を確認した。

袋状土壌の所在確認後、土壌口部辺の配石状況なり特殊施設の有無を確かめ、さらに土壌の機能を考える上から、土壌の形態なり充填する土壌・遺物に留意し、土壌相互の関係等に細心の注意を払い発掘を進めた。この間に経過についてはこの種の調査には重要であるが、第二次調査実施後の正式な報文に詳述し、その結果のみを次に表示し、主なものについて略述してみよう。（常川）

第1次調査区の全景

- ▼1次・土壌群在地区 中央に礫が集積している土壌は1次・P.19、この土壌一帯は重機が深い。
- ▼1次・調査区北西隅の土壌群 左上隅の P.9から右下隅 P.14まで南北一列に並んで見える。

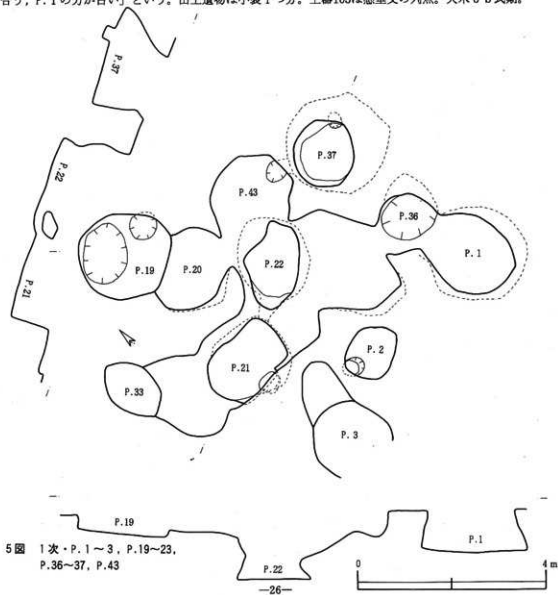


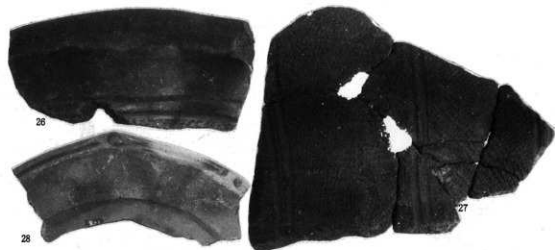


4 図 第 1 次調査区検出遺構 (第 1 次調査概観より転載)

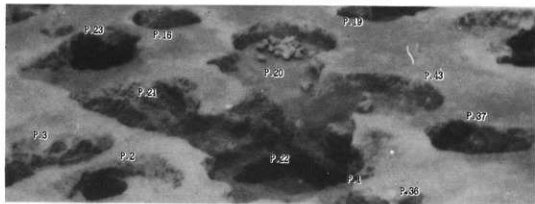
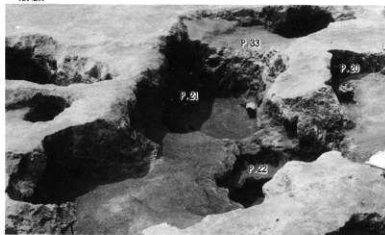
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 1	160	198	88	Ⅲ期	土器=26~28 遺物僅少	他の1基と重複
P.36	118	136	68	Ⅲ期	土器=102・103	他の1基と重複

P. 1とP.36とは、土壌群在地区の東端に切り合って存在する。P. 1は、墳体上半部の崩壊が著しいが墳底周壁は良存しており、掘り込みのしっかりした大型土壌といえる。子ビットはない。出土遺物は「僅少」とあり、小袋7つほど。土器28は残鉢破片で、裏面の口唇の沈線装飾文はよく見られる施文。土器27は大型深鉢の体部。大木8b式併行の土器で当土壌の時期を示す。36は小型の土壌。「P. 1と切り合う、P. 1の方が古い」という。出土遺物は小袋1つ分。土器103は懸垂文の列点。大木8b式期。





▼1次・台地北西端付近。設定した調査区から検出された15基前後に上る土塊群。P.22を中心に重複した土塊群は墳底を除き原形をとどめぬほど崩壊。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 2	104	86	40	Ⅱ期	土器=1・17・29・31	子ピットあり

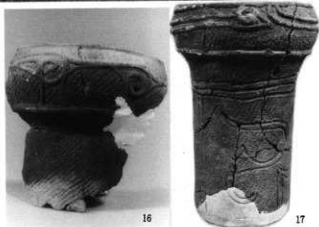
1次発掘は、台地突端部付近と遺物散布量が多い北西端部付近の二カ所で行い、前者は遺構皆無につき放棄、後者で黒色土を広く剝取して群在中期の土壌上面が「随所に」確認されたのであった。



▲1次・土壌群在地区の上面。

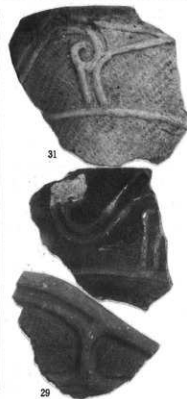
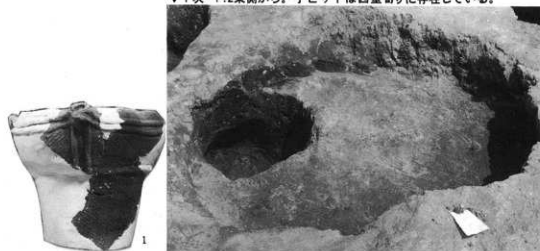
中期の一生活面。下面で5箇の土壌群が検出された。

上の写真の中央左寄りの破片は土器16、下辺中央の個体は土器17である。概報には土器17はP. 2出土とあるが、写真の出土状態で見る限りP. 2の掘り方は見えない。遺物の注記には、土器17は「南北T、住居址5」とある。従ってこの写真は、後者地区にトレンチ掘りした時の出土状態と見られる。中期の生活面を示す状況と解される。



P. 2は、P. 22などを中心とする12基以上、少なくとも15基ほどの土壇が密集する地区の一角にあった。浅い掘り方でオーバーハングの痕跡もない。浅めの上狭下広の形状であったためか、西壁の子ピットは口径38・深さ50cm。土器1は小破片を接合して得た個体。四単位構成の口縁部画文で、区画隆線の頂部に渦文を施す。土器31は2片が同個体で、2本平行の貼紐施文が特徴。渦文にとりついた剣先文は該期に多用される。1・31とも大木8b式併行で加曾利BⅠ式（新）の当地方の特色をよく示している。

▼1次・P.2東側から。子ピットは西壁寄りに存在している。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.19	180	165	40	不明	土器=なし 河床礫多し	子ビットあり

▶ 1次・P.19 墳底に投棄礫。子ビット線にも礫

P.19は浅い土坑で、墳底の一角に河床礫が寄り集って出土した。南側のP.20と重複しているが先後関係は不明。これら礫の位置に、実測図平面では落ち込みの表示があるが、断面では何もなく、状況写真にも何も写っていない。概観には、土坑全景写真に「P.19内の小ビットの石塊」と説明書きがあるのでくぼみがあったのかも知れない。東壁に子ビット=口径58・深さ47cmがある。遺物は小袋1つ分で阿・加E。時期不詳。

▶ 1次・P.19 墳底に寄り集った状態で出土した礫

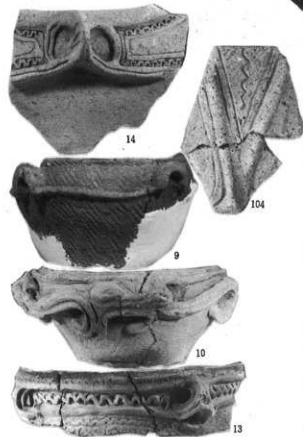
▶ 1次・P.19 子ビットとその真口の礫。埋積土の上面に集ったためかや礫が内積して見える。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.37	120	210	128	I期	土器=9・10・13・14・104	子ビットあり

P.37は、土壌群在地区に接近して存在するが重複はない。東壁に「口径30・深さ20cmの小ビットあり」。また「付属墳でP.43と結ぶ」とあり、下の写真がその状況。ただし、この「付属墳」が後時の疑いもあり、土壌の閉鎖機能からも納得しがたい。墳内出土の土器は、阿玉台末葉と大木8a式とで、9・10は後者の古手の要素をもつ土器である。

▶1次・P.37 全景。墳底に14の土器が見える。下は、P.3への貫孔。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.20	165	168	52	I期	土器=20・56・65~67	5図に実測図
P.43	170	155	35	I期	土器=120	

P.20は、北にP.19, 東にP.43・P.22と重複する。壙内出土の土器は、個体=20, 破片=65~67で、いずれも阿玉台式末葉。20の集合沈線を地文は、該期に至って普遍化する特徴的な施文。67は、背が高くエラの張った深鉢の口縁部破片で、四対応する波状口縁の裾部。縁線上の縄文施文と半截竹管の平行沈



線とが特有の施文で、すでにキャタピラ様の結節沈線が省略された〈退嬰型〉を示している。深さは50cmほどで、実測図からはほぼ円筒状に崩壊していることが分かる。上狭下広で浅めの原形であったことが推定できる。

P.43は、P.22と重複し、東側のP.37と接近した位置にある。壙体の写真は、オーバーハングの遺存が分かる北壁と壙底の土器片とを撮ったもの。この遺物は見当たらず、阿玉台式土器片=120を含む二片だけ。壙体は上狭下広の浅めの形状であり、P.20同様に阿玉台式期の独特の形態か。「小ピットあり、P.37と結ぶ」は疑問。

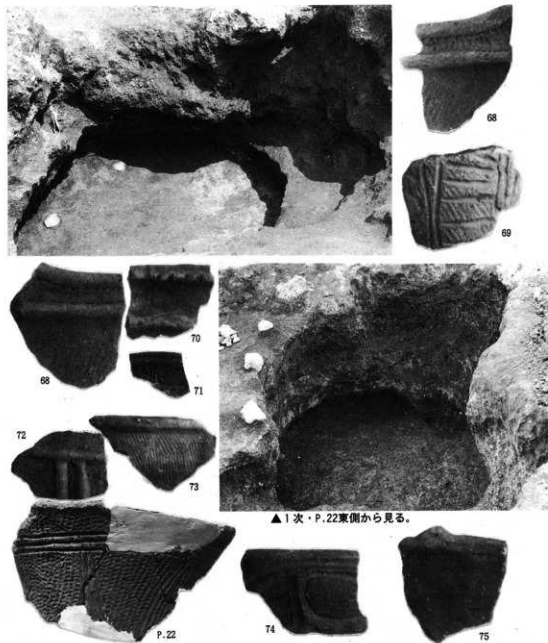


▼1次・P.43 西南から見る。手前はP.22。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.22	105	152	95	I期	土器=68~75 タルミ炭化物	

P.22は、調査区南端の土壌群集区の中央部にあり、隣接するP.20・P.43・P.21の他にも発掘では確認できなかった敷基が重複していたようだ。下の写真で右手が西南で、この部分の段差面はその1つの墳底であろう。出土した破片では阿玉台式が卓越している。この頁右下隅の土器は新しい時期。現在か。





P.21	115	165	90	N期?	土器=21・32図b.①~⑩
------	-----	-----	----	-----	----------------

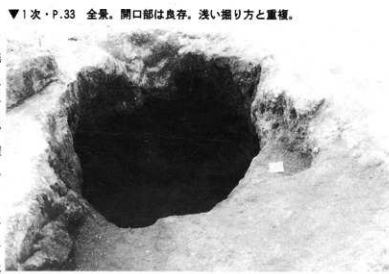
P.21は、調査区南端の11基以上の土壌が群集している部分での一基。重複のため墳体上半部の崩落変形が著しい。墳底南隅に子ビット=口径32・深さ57cmがある。墳底の形状も不整で、実測図では長方形に近い楕円形。墳内から出土し、右の曾利式土器がある。曾利Ⅱ式に比定されるが本県では稀少例。当土壌出土の土器は、阿玉台式、大木8b式及びその対比期の土器、大木9式(古)比定などが含まれるが、加曾利EⅠ式(新)=大木8b式の土器が量・種類とも多いので該期比定とすべきか
▼1次・P.21 墳底南隅に子ビット(左手)。土壌群集地区での一基。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.33	95	185	107	N期	土器=8・90~96 礎あり	1次、P.16の頁に全測図あり

▼1次・P.33 全景。開口部は良存、浅い掘り方と重複。

P.33は、開口部で浅い掘り方(後世の攪乱)と重複するが遺存がよく袋状の原形を残している。北側壁体に斜め上方を向く貫孔があり、隣接するP.16の墳壁へ通じているが後時の貫孔の痕もある。墳底に小穴がある。墳底に倒いた状態で土器・礎が散在し、壁に寄りついている。投棄により、埋積土の斜面を転落した結果であろうか。この出土



状態から遺物の一括投棄及び
共存の可能性が高い。土器個
体=8は大木8b式期相当
で、沈線間に列点を施す該期
の特徴的な文様。破片94は補
修孔がある。P.16はⅡ期の土
壇で当土壇より古く、両者が
共存して貫孔で結ぶ筈はない。

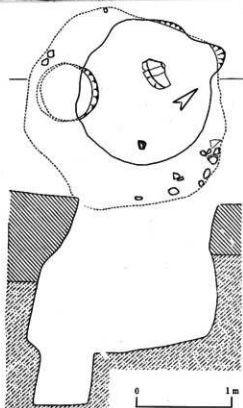
▶P.33壇底の遺物。左手の個
体=8、右手の破片=93。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 3	142	222	158	V期	土器=30・32~34 礎あり	子ビットあり

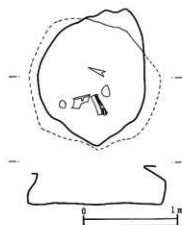
P. 3 今市層を掘り抜き田原ローム火山灰層中に横底をもつ。南西隅に子ビット=口径55・深さ55cmが1つ。掘り込みのしっかりした深い土壌で、子ビットをもつので阿玉台式期には上らない。「底面に土器片・礎あり。浅鉢形土器出土」とあり朱彩の浅鉢を含め小袋5つ分。32・33など加曾利EⅡ式期比定。

▼1次・P.3 上辺中央は重複する小穴。東側から撮影。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物
P. 5	113	142	40	Ⅱ期?	土器=38 遺物僅少

P. 5 北側壁体が急にオーバーハンヅし、かなり強い上狭下広の形態と見られる。「土壌内に遺物僅少」とある。実測図にある遺物は行方不明。破片38は表記によりこの土壌出土と見られるがP.25の破片と接合。



7図 Ⅰ次・P.5

▼Ⅰ次・P.5 南側から撮影。

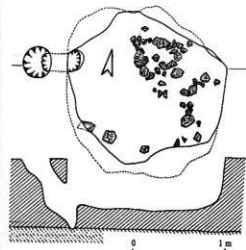


名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 9	140	190	58	Ⅰ期?	礎あり	

P. 9 今市層中に墳底がある浅い土壌で壁体崩落が著しい。墳底に浮きで礎が寄り集って出土。かなり極端な上狭下広の形状で阿玉台式末葉に多い形態。「口径30cm程の付属墳をもち地表を結ぶ」という。



▲Ⅰ次・P.9 東側から。手前は小穴の掘り方。



8図 Ⅰ次・P.9

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.4	110	187	87	Ⅲ期	土器=35~37	他の1基と重複
P.28	160	175	50	Ⅰ期?	土器=加E1式破片が1片	子ピットあり



◀1次・P.4 横産西産ぎわに土器個体=調下半部と、破片=37とが出土。



P.4

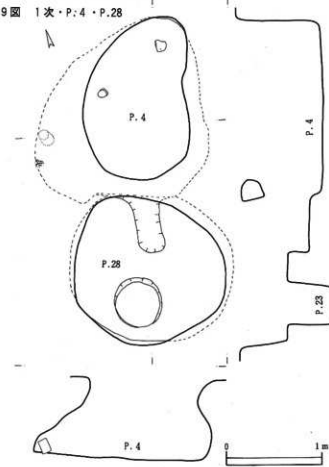


35



36

9圖 1次・P.4・P.28



P. 4 この土壇は南接するP. 28と墳底が貫通した掘り上りとなっている。「P. 28と切り合いがP. 4が古い」とあるが、P. 4 墳底出土の破片37は加曾利E 1式（古）の最終段階か、大木8 b式古の段階かに比定され、浄法寺期の腰いもある破片1片を伴うP. 28とは同じ位の時期かP. 4の方がやや新しいか、と考えられる。

両者の墳底が接触し貫通したので本頁下の写真のように開口部が橋状になっている。この貫通部分は、墳底の浅いP. 28の北隅に設けた子ビットと、墳底の深いP. 4の南隅とが接触したもの。壁体の強度維持から見て、浅い土壇P. 28が隣接土壇の埋積土がのぞいて見える壁に更に子ビットを設けた、と見るより深い土壇P. 4が掘削終了間ぎわに既存の土壇の埋積土まで切り込んでしまった、と見る方が自然ではなかろうか。この点からもP. 4が少し新しいようだ。

P. 28 この土壇は、墳底南壁ぎわに子ビット＝口径50。深さ45cmがあり、隣接土壇と接する北壁ぎわにも深さ20cmほどの子ビットがある。出土遺物は加曾利E 1式相当の1片だけで、詳しい時期は不明。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 6	120	163	93	Ⅲ期	土器=2・3・18・39~41 クルミ炭化物	

P. 6 開口部西側で浅い掘り方と重複。北隣にP. 5があり両者とも同時期の所産と見られる。北から東へかけての壺体がオーバーハンドし袋状の原形を留める。壺内上位に写真の出土状態で土器個体2と18とが口縁部を合わせるように存在。埋没が進んだ時期に一括投棄したものであろう。「東底面上よりクルミ炭化物出土」とある。3は破片接合で得た個体。2・3・40など貼紐が特徴的。加曾利E 1式(古)の最終段階に対比。18は結び目つきの縄文原体を縦位施文する特徴的なタイプ。底部直上ナデ。

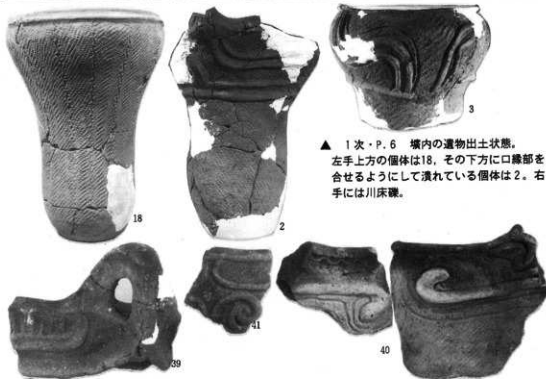


▲1次・P. 6 西側から撮影。開口部手前の浅い掘り方は別期。
▼壺底北側並ぎわに河原石、土器底部が散在。



10図 1次
・P. 6



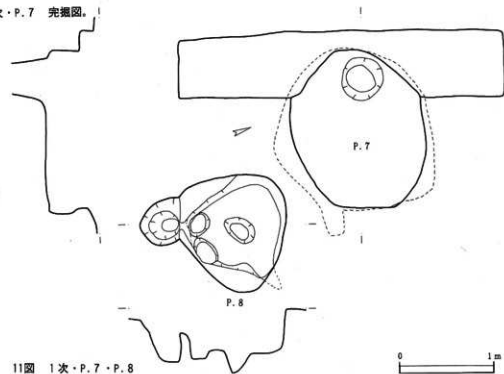


▲ 1次・P.6 墳内の運物出土状態。
 左手上方の個体は18。その下方に口縁部を
 合わせるようにして漬れている個体は2。右
 手には川床礫。

P. 7	140	170	54	不明	土器など遺物なし ケルミ炭化物	子ビット=径45 ・深さ45cm
------	-----	-----	----	----	--------------------	---------------------



▲
1次・P.7 完掘図。



11図 1次・P.7・P.8

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 8	115	100	45	Ⅲ期	土器=42~44	原形は袋状
P.11	196	182	43	不明	—	子ビットあり

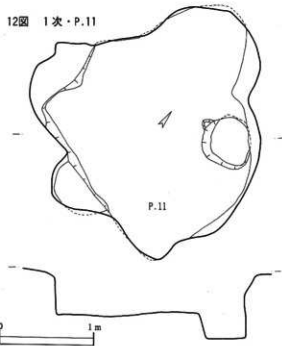


P. 7 はほぼ筒状になるほど崩壊している。墳底西隅に子ビットが1つ。開口部西側を中世所産?の長方形土壇=3.5×0.7m・深さ15cmに切られる。「底面上よりクルミ炭化物出土」。墳内から土器の出土がないので時期判定ができない。

P. 8 実測図では墳底が三角形を呈し、南側に小穴が接続しているが、完掘写真では楕円の概形を呈している。墳底南壁に浅い子ビットが2つ並んでおり、中央にも1つある。「袋状を呈しないが、もとは袋状を呈していた」という。墳体の損壊が著しい例である。南側に突出して接続している小穴は別の遺構であろう。墳内出土の土器片は阿玉台式=44と加曾利E1式(古)=43と混在するが、子ビットを伴う土壇であることから後者の所産=Ⅲ期と判断した。

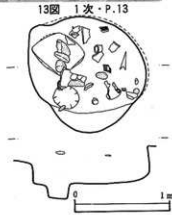
P.11 浅い不整形の土壇で、墳底東壁ぎわに子ビット=口径45・深さ28cmが1つある。実測図の平面形で北側部分が突出しているが、この部分は写真で見るとやや浅く、別の土壇が重複しているものと見られる。西側、南側の開口部の縁辺も突出しており、発掘中での損壊も含めかなりの変形。

12図 1次・P.11



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.13	120	124	38	Ⅲ期	土器=19・45 石器出土あり(磨石)	

P.13は、底径に比べ浅い土坑で、上半部を後時の耕作で削取されているにしても、かなり極端な上狭下広の形状であったものと思われる。坑底南壁寄りに子ピットが1つある。坑内上位で土器の破損個体2点、底部1点、袖珍土器=19、磨石を含む河原石などが出土。実測図の坑内南半に、左側の個体は写真の復元個体、右側の個体は行方不明で出土状態を別角度から撮った頁左下隅の写真で見るとキャリパー状深鉢（2本併走の貼紐でダンラク文）。この2個体から加曾利EⅠ式（古）期の最終段階の所産。
▼1次・P.13 坑内中央で、かなり埋没が遠んしてから放棄された土器・礫が出土。



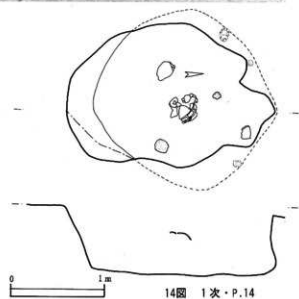
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.14	150	190	68	N期	土器=4・5・46~48	

▼1次・P.14 上辺中央が北。開口部崩落が著しい。

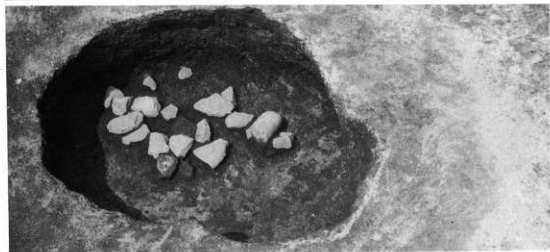


P.14は、ほぼ円筒状になるほど躯体が崩壊している。壊底は隅丸方形に近く、若干凸凹がある。開口部ふみ壊しの疑い。壊内中央の上位に破損個体=5が、北壁の壊底には破片=47?が出土した。46は底部で、頸部がくびれる壺形土器。剣先文を伴う懸垂文の特徴から大木8b式。4は沈線区画により十字文を横に連続する。大木8b式対比期の好セット。

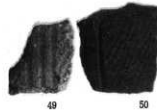
▶出土の状況。
壊内中央に浮きで土器個体=5があり、襷も点状している。



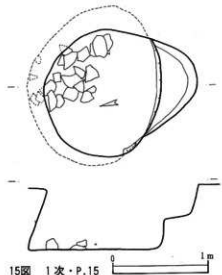
P.15	135	172	65	V期	土器=49.50 礫が20個ほど
------	-----	-----	----	----	---------------------



▲1次・P.15 墳底東北部に礫が寄り集って出土。
▶完備状況。西側から撮影。



P.15は、北側壁がオーバーハングし袋状の名残りを留めるが、南側開口部が著しく崩落し、上半部の大幅な損壊が顕著である。墳底東北部に角礫が寄り合って出土。そのほとんどは山礫である。「底面に約20ヶ位割った礫が敷いてあった」「最初から石塊（比較的扁平な礫）が敷設された可能性が高い」とある。礫の出土状態を写真で見ると礫は並べたり組み合わせたりはしておらず、また墳底を覆う第1次埋設土の中にあり、明らかに浮きの状態の礫も見られる。従って礫は「敷設された」ものではなく、土填塞絶後に投棄されたものと見てよい。土器片など出土遺物は僅少で小袋2つ分。49・50は採録の胴部破片で磨消手法を伴う懸垂文が特徴的。加曾利BⅡ式期の新しい段階に比定。



15図 1次・P.15

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.16	125	105	48	Ⅱ期	土器=51~55	他の1基と接近

P.16は、隣接するP.33との間に小孔が墳底から貫通している。P.33はⅡ期の所産で、両者には時期差があり共存して結ばれていたとは思えない。墳底に浮きで散在する土器片=52・54からⅡ期と判定。墳底北側に小穴の影が見えるが、実測図では不定形。子ビットかどうか分からない。



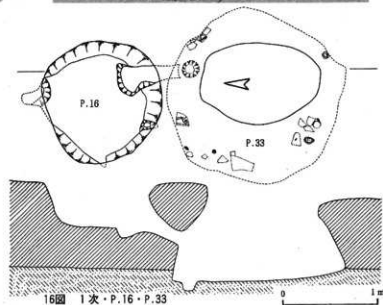
- ▶1次・P.16 墳底南側(右下)に貫通孔。
- ▶墳底に浮きで土器片=中央に54、右側に52が散在している。



54



52



16図 1次・P.16・P.33

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.17	150	185	69	I期	土器=57~60・123 石器=石皿	他の1基と重複
P.27	105	153	76	V期	土器=89・124	他の1基と重複

P.17=北、P.27=南とが重複、後者が新しい。P.17は、重複箇所の崩壊が著しいが北壁は袋状の原形をよく留める。墳底中央から北側に土器片・石皿破片・礫などが散在。北壁付近に阿玉台式末葉土器の大破片=123。破片には大木8b式期、加曾利EⅡ式期の土器も混在するが、阿玉台式期末葉の土壊と判断される。オーバーハングの度合いがきつく、浅めの上狭下広型の土壊で該期の典型例といえよう。123は、四対応する波状口縁でニラの張った背の高い深鉢。全面に地文を施し、多量の雲母を含む。

▼1次・P.17 手前はP.27との重複部分。向う側は北壁で遺物が点在。



123



57



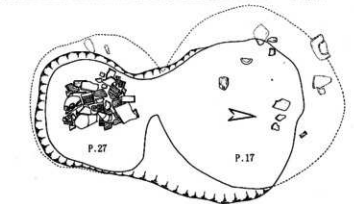
58



60



59



17図 1次・P.17・P.27

0 1m

P.27は、深さに比べて底径が小さい。西側壁面に袋状の原形を留めるが、壁体の傾斜は緩めである。袋状は呈するが、上狭下広がさほどに極端でない、小型で深い形状であったことが、重複する阿玉台式



▲1次・P.27

墳内中央に一括投棄された個体破片=124。向う側は西壁の下部で、壁に寄りついて壁が見える。

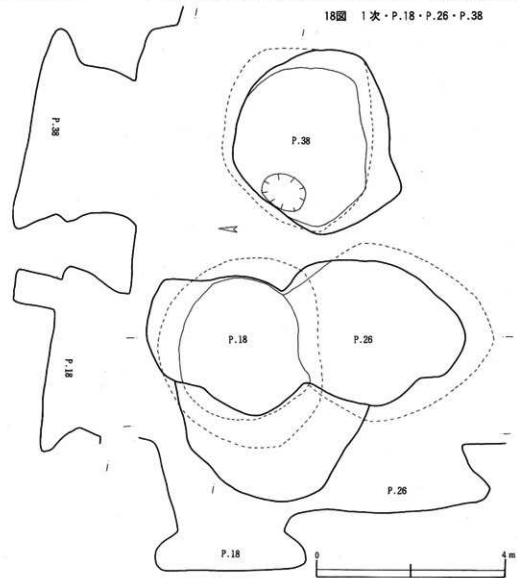


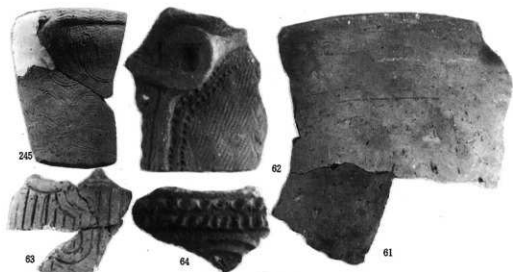
末葉のP.17との比較から分かる。墳内中央部に、墳底からかなり浮きの状態で加曾利EⅡ式個体=124が出土。該期の土壌と判断される。この個体は胴下半を欠損、土壌埋積が中位ほどまで進行した段階で投棄したものであろう。「この土壌の底部壁には河原石、山石などがあり、石皿破片も存在する」とある遺物と124とは投棄に時間差があるかも知れない。他に破片は小袋2つ分ほど。124は、流れるようなキャリバー状器形のプローションを呈し、渦巻文を伴う横帯区画文と懸垂磨滑帯もつ。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.18	140	215	130	I期	土器=61~64・245(2次調査の土器図面の頁に掲載)	
P.26	150	190	70	III期	土器=22・23・88	他の1基と重複
P.38	145	195	72	IV期	土器=105・106 礎あり	子ビットあり

3基が隣接している。P.18とP.26とが重複して西側にあり、この二者は他の掘り方とも重複する。「P.18と切り合いがP.26の方が新しい」。東側にP.38がある。「西隅に口径45・深さ50cmの小ビットあり」。東壁下部はオーバーハンダシ袋状の原形を留める。全測図は、P.38は中世?の長方形土壇と重複。

18図 1次・P.18・P.26・P.38





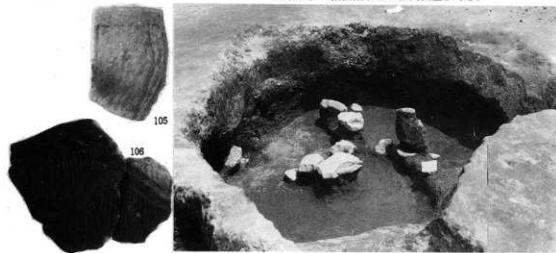
P.18は、小型だが墳体下半に袋状の原形を留め、62・245（2次調査の土器図面の頁に掲載）など阿玉台式末葉土器が伴出する。上狭下広で浅めの該期独特の形状。

P.26は、「底面上に土器片あり」とあるが破片は小袋1つ分ほど。個体=22が伴出。22は懸垂文に、向い合う鍵手文が施される。大木8b式対比期の当地方の特徴文様。

P.38は、墳底に写真のように山礫が浮きの状態で出土。敷設ではなく投棄である。出土破片に連弧文があり加曾利EⅡ式古期。



▼1次・P.38 墳底に浮きで出土した礫群。礫は扁平な山石で、一括投棄らしいが高気盤がある。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.23	135	163	70	Ⅲ期	土器=6・76~78	実測図は55頁にあり

P.23は、P.24・P.25と隣接し、前者と墳底が接触している。墳壁は両側部分の遺存がよく、袋状の原形を留める。墳底に深鉢の大破片=6、底部などが寄り集って出土。これから大木8b式期に対比。6の波状が2本になっており吉手の様相を示す。破片には、関山式、阿玉台式も混っているが、6が初期の投棄遺物と見られる。

▼1次・P.23 右手奥が南側。袋状の形状を留める。



▲P.23 墳底に出土した6などの土器片。





P.34	146	134	40	Ⅲ期	土器=97	子ビットあり
P.35	120	110	48	Ⅲ期	土器=96・98~101	やや袋状を呈す

P.34は概要不詳。「西隅に口径45・深さ45cmの小ビットあり」。破片が小袋2つ分で、接合破片3点。まとめて投棄か。大木8b式期相当。図面写真なし。

P.35は円筒状に近い形状。壙内中央に浮きで浅鉢破片=96が出土。破片が小袋1つ分で僅少。「土器は加曾利E₂式破片」とあるが該当なし。大木8b式期相当。袋状の原形を留めぬほどに崩壊し、浅い円筒状を呈する土塊である。

97



98



100



99



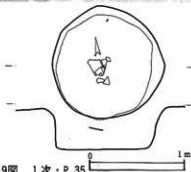
101



▲1次・P.35 円筒状に近い形状。
壙内の出土土器は96。



96



19図 1次・P.35

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.24	125	145	50	N期?	土器=79・80 磯多し	
P.25	158	170	40	土器=7・81~87		

▼1次・P.25 墳内から出土の備体、復元したものが左の土器=7。



▲P.25全景 室形が著しく、遺物はかなり埋没が達んでの投棄。



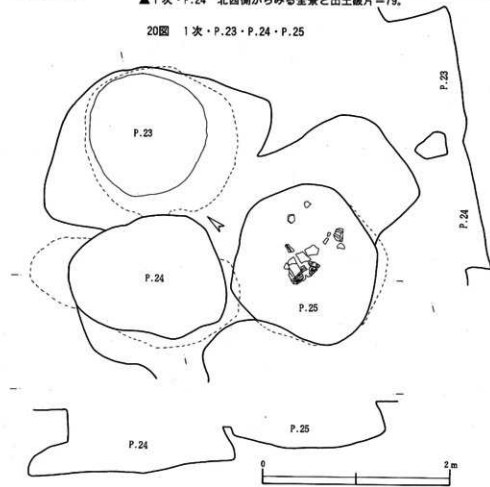
P.24が東に、P.25が西に並び、両者の下位壁面が接触し、発掘時に貫通した。P.24は「東壁に土器片・自然石が比較的多くあり」、写真の角礫はその一部。開口部では、他の浅い掘り方と重複している。

P.25は、西北壁に袋状の原形を留める他は全体が円筒状になるほど崩壊している。出土個体は境内上位にある。破片には阿玉台式も含むが、7・80及び86（同個体）・85などから大木8b式新に対比。



▲1次・P.24 北西側からみる全景と出土破片=79。

20図 1次・P.23・P.24・P.25



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.39	125	145	80	Ⅱ期?	土器=107・108	他の1基と重複

「P.40と切り合う、新旧関係不明」。P.39とP.40とは重複し、ひと続きの概形を呈している。墳底も同レベルであるため両者の区別がつかない。P.39は南側の壁面が大きく外傾している。開口部の踏み履しによるものであろうか。写真の墳体で向奥は南東壁。墳底に近い部位であるため僅かに崩壊を免れてオーバーハングが認められ、

袋状の名残りを留めている。その壁ぎわに、墳底から浮き出した状態で大きな河床礫が出土している。墳底は深く、今市層を掘り抜いて田原ローム火山灰層に達している。実測図には描かれていないが、別の角度からの写真（1次・P.40の頁）には墳底の東側縁に子ビットの加き影が写っている。



▲1次・P.39 北側から。

二つの土壌のクロス部が突出した影か。墳内からの出土遺物は僅少で、小袋1つ分ほど。時期を確定できる資料や出土状態を示すものはなかった。

107・108は口縁部破片で大木8b式相当。これらが本土壌の時期を決定するかどうかははっきり分らない。

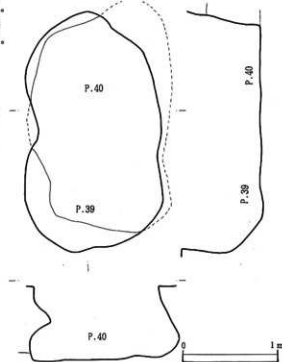


107

108

▲1次・P.39 北側から。 21図 1次・P.39・P.40

墳底から浮いて大きい河床礫が出土。向側は南壁で、崩れて外傾している。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.40	132	160	76	1期	土器=109・110	他の1基と重複

P.40は、P.39と重複し墳底の区別ができないが出土個体により阿玉台末葉の所産と判断される。底径に比べ深い土壌で、壁体の崩壊が甚しい。墳体のうち、西側から南側にかけての下位壁面が遺存、袋状の形状を残す。墳底中央部に浮いて土器個体、西壁に寄りついて楕円偏平な河床礫が1個あり、共に埋没途上の投棄を示している。墳底はフラットに整形されている。この土壌は、しっかり掘り込まれた袋状を呈する穴と見られるが、激しい踏み壊しによって検出時の如き変形を逃げたものであろう。出土遺物は、個体他に小袋4つ分ほどの破片で、それらの中には時期を明瞭に示す資料はほとんどない。

個体は、キャリバー状深鉢の胴下半分で、幅広い沈線文で器面を埋め尽くす充填施文が特徴。口頸部の

複弧文、胴部の縦列文は当地域の大木8a式の組成土器群のひとつ。火炎系の土器である。阿玉台式末葉に位置づけられる。109・110は加曾利E1式だが、新しい段階の大木8b式対比期の土器で、重複するP.39の出土土器と同時期。

▼墳底に浮きで出土した個体。



▲1次・P.40 西側から、内奥に遺物が見えるのが本土壌。



▲近景 墳底に浮きで出土した個体。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.41	132	210	58	Ⅲ期	土器=111・112	子ビット2つあり

開口部の崩壊が著しい。墳底の東、西端にある子ビットは2つとも円筒状で「ともに口径50・深さ40cm」という。この土壌は、浅い縦長の土壌と重複している。先後不詳だが、浅い土壌は中世または新しい時期の所産か。墳底は今市層の下面とはほぼ合致する。墳底から浮きの土器片は確認できない。北壁から西壁にかけてはオーバーハンダシ袋状を示す。遺物は、小袋3つ分の土器破片。111は、深鉢形土器の把手、112は、同様土器の胴部破片。ともに大木8b式相当期。



▼1次・P.41 墳底の東、西端に子ビット。



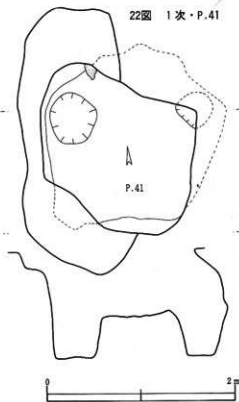
▲墳底東端の子ビット、その右は墳底から浮いた土器片。



111



112



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.42	160	185	53	N期	土器=11・15・24・25・113~119	

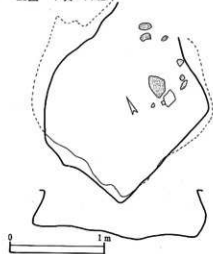
閉口部と墳底との縁辺がほぼ一致するほど崩壊している。墳底は不整形で円よりは方に近い。北壁はオーバーハングし、袋状の名残りを留める。墳底は凸凹があり、水平でもない。子ビッドはない。墳内から出土した遺物は、墳底から浮いており、この土墳の埋没進行の途上で投棄されたことを示す。礫は東壁よりに散在。図のドットが礫、線図いは土器片。破片の出土量は多く、阿玉台式末から大木8b式相当期までの土器が混在している。これらのうち、墳底の東隅に寄りついて出土した個体(25)、同じく、西隅で出土した個体(24)がこの土墳の時期を示すものと判断される。この二個体はいずれも底部を欠損しており、他の破片や石皿破片など礫と共に廃棄品として投げ込まれたのであろう。土器個体は円筒状の体部をもつため、投棄時の勢いで墳内を転り、それぞれ壁に寄りついてその位置に留ったものと見られる。これら遺物が、



墳底からの浮いた状態を示すのは、投棄の時点で土墳の下位空間が既に埋没していたことを意味するが、それが踏み壊しか埋め戻しか等の原因については充填土の観察がないので不詳。遺物の出土状態から、埋没途上で不要品投棄の典型例をなす土墳である。

▲1次・P.42 南側から。墳底に浮きで礫群、大きい偏平な礫は石皿の破片。写真の墳体の中で、右上隅の位置に25の個体、左下隅の位置に24の個体が、それぞれ墳壁に寄りついて出土した。

23図 1次・P.42



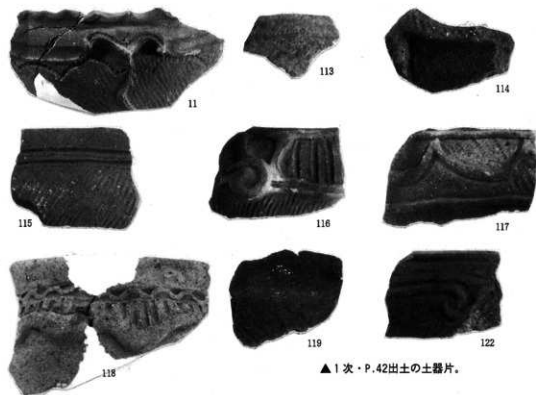
1次・P.42の遺物と
その出土状態

- ▶墳底の東隅の信体。
- ▶墳底の西隅の信体。
- ▶墳底の東隅の信体。



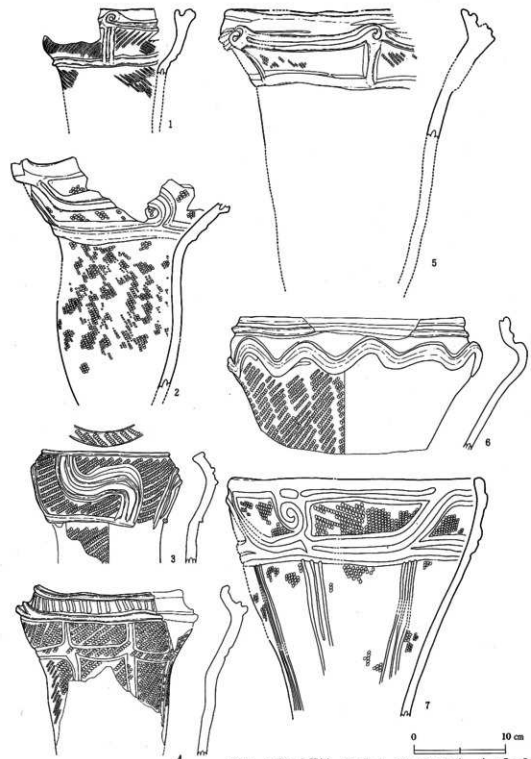
- ▼墳底の西隅の復元信体.24.
- ▼墳底の東隅の復元信体.25.





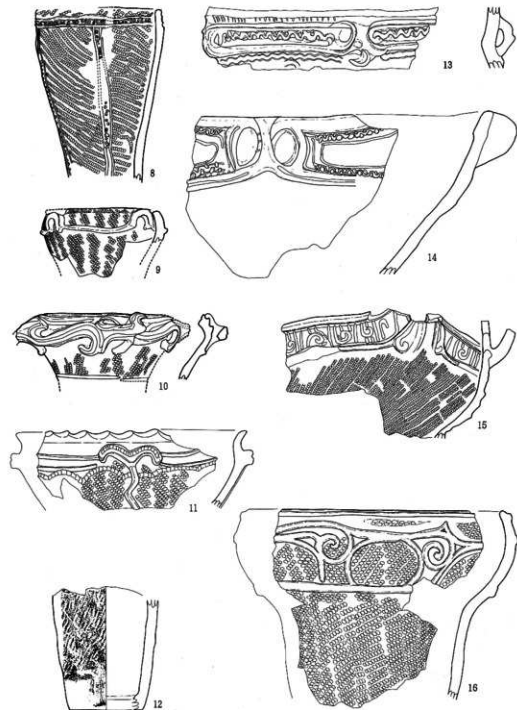
▲ 1次・P.42出土の土器片。

P.42出土の土器は、阿玉台式から加曾利E I式（新）までの各形式にわたるが、この土壌に伴出するものは横底壁ぎわに横転して寄りついていた個体＝24・25である。24は、口唇を肥厚させて二重口唇をつくり出し、四対応する波状口縁とする。波状部は渦巻文で外傾し、これを起点として体部に綾格文による懸垂文が施される。口頸部が外反する深鉢形で、縄文地文だけのシンプルな体部文様に綾格文の懸垂文がアクセントになっている。25は、キャリパーで状深鉢形だがくびれ部の区画線が略されている。口唇は二重口唇、口縁部文様は四対応する渦巻文で外傾し、これを2本組みの隆線が弧状に連続して形成している。体部文様は縄文地文に、渦巻文を起点とする綾格懸垂文で、前述24と同様。24と25とは、四対応する渦巻文、体部の綾格懸垂文など共通要素をもち、当遺跡における加曾利E I式（新）＝大木8 b式対比段階の特徴的な在り方を示している。両者とも小型（共に現高約20cm）で、施文は斜上方からの視点を意識している。当遺跡の土器は、該期に至って小型化するの本土壌に限らず普遍的な傾向である。体部裝飾文である蛇行沈線に代えて、綾格文を多用する手法は横沢遺跡他の東北各資料にも見られる。大木8 b式対比期に入って急に敷衍する意匠と認められる。11は、大木8 a式の影響をうけた阿玉台式で‘台の子’土器である。この仲間は栃木・茨城から福島南部に局地的な分布をもち、大木7 b式と阿玉台式との接触で発現した、とする見解もある。113・114は阿玉台式、115～122は前述の24・25と同時期の土器と思われる。117・118の波状隆線、122の剣先文も該期の特徴的モチーフである。



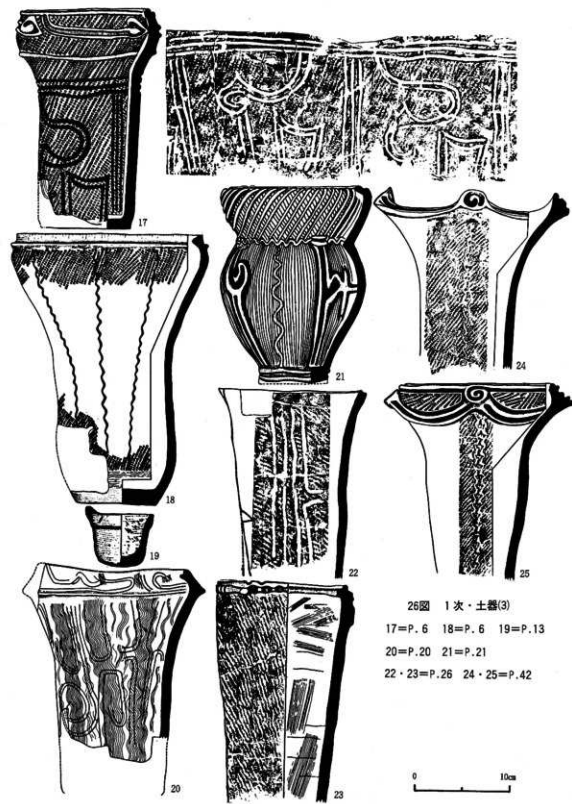
24图 1次・土器(1) 1=P.2 2・3=P.6 4・5=P.14
6=P.23 7=P.25

0 10 cm



25図 1次・土器(2) 8=P.33 9・10・13・14=P.37
 11・15=P.42 16=南北トレン子





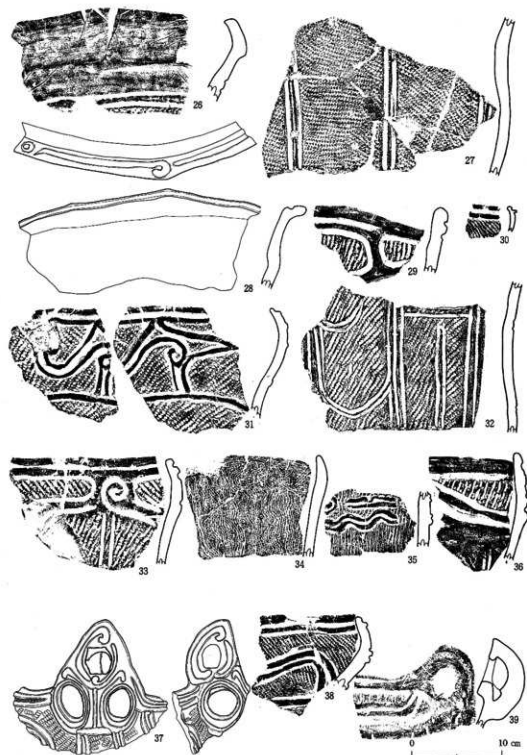
26圖 1次・土器(3)

17=P. 6 18=P. 6 19=P. 13

20=P. 20 21=P. 21

22・23=P. 26 24・25=P. 42

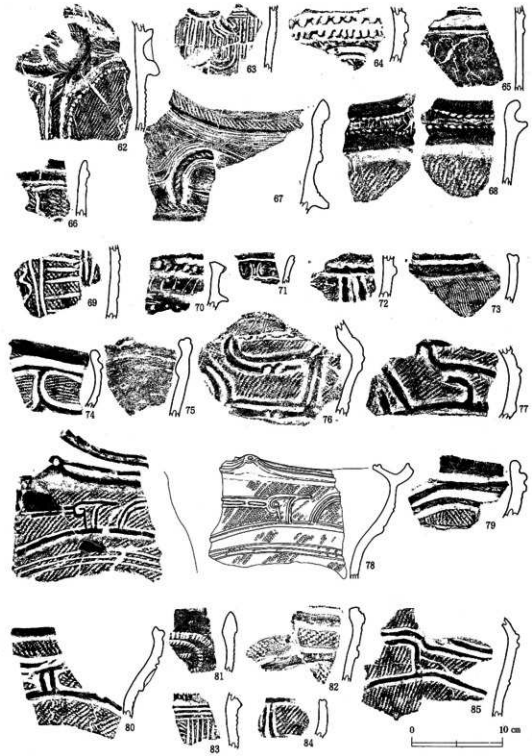
0 10cm



27图 1次・土器(4) 26-39



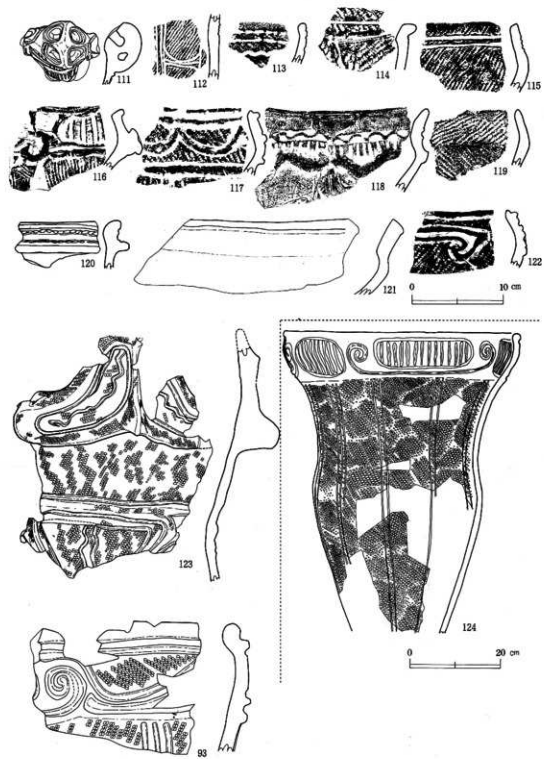
28图 1次・土器(5) 40-61



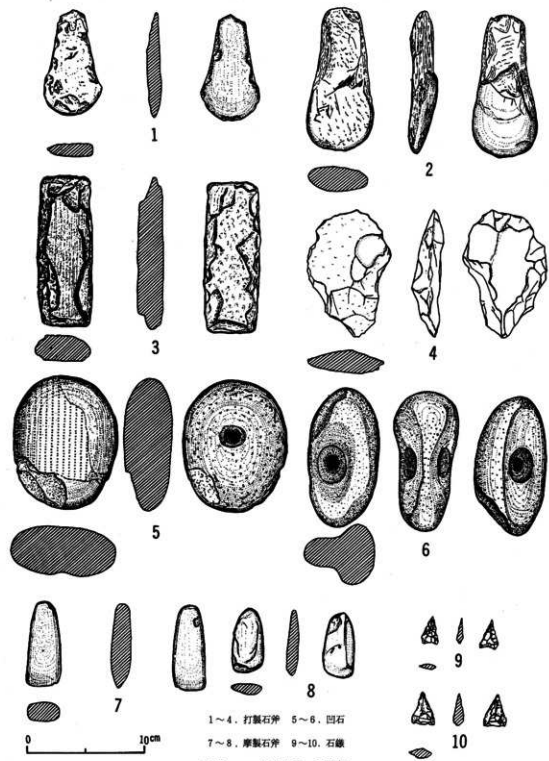
29圖 1次・土器(6) 62-85



30圖 1次・土器(7) 86-110



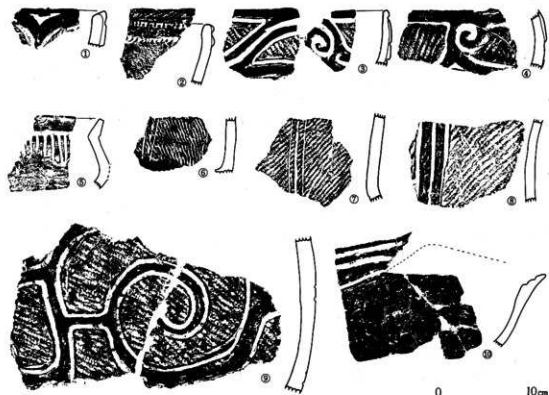
31图 1次・土器(8) 111-124



1~4. 打製石斧 5~6. 凹石

7~8. 磨製石斧 9~10. 石鏃

32圖 a. 1次調査・石器類



328 b 1次・P.21=①~⑧

6表 第1次調査検出の袋状土壌概要表

土壌 番号	口径 cm	底径 cm	深さ cm	特 記 事 項
1	160	198	88	P36に切り合う、遺物の出土量僅少
2	104	86	40	西壁に口径38・深さ50cmの小ピットあり
3	142	222	158	南西壁に口径55・深さ55cmの小ピットあり、底面に土器片・礫あり、浅鉢形土器出土
4	110	187	87	底面に土器片あり、P28と切り合うがP4が古い
5	113	142	40	土壌内に遺物僅少
6	120	163	93	土壌内から完形土器2個、東底面上よりクルミ炭化物出土
7	140	170	54	底面上よりクルミ炭化物出土、西隅に口径45・深さ45cmの小ピットあり
8	115	100	45	袋状を呈しないがもとは袋状を呈していた。
9	140	190	58	底面に礫あり、口径30cm程の付属墳をもち地表と結ぶ
11	196	182	43	北壁に口径45・深さ28cmの小ピットあり
13	120	124	38	完形土器・石器など多数底面より上から出土
14	150	190	68	底面より上から土器出土
15	135	172	65	底面に約20ヶ位割った礫が敷いてあった
16	125	105	48	底面に土器片多くあり、P33と連結する
17	150	185	69	P27と切り合う、北壁に接して阿玉台式土器片・石皿などあり
18	140	215	130	P28と切り合う
19	180	165	40	東壁近くに口径58・深さ47cmのピットあり、底面上に河原石多い
20	165	168	52	P19と切り合う
21	115	165	90	南隅に口径32・深さ57cmの小ピットあり
22	105	152	95	土壌内から多量の炭化物とともにクルミが多出する
23	135	163	70	P24と連絡する
24	125	145	50	東壁に土器片・自然石が比較的多くあり
25	158	170	40	底面上に大形土器片あり
26	150	190	70	P18と切り合うがP26の方が新しい、底面上に土器片あり
27	105	153	76	P17と切り合う、底面より上から大形土器片が敷いて出土
28	160	175	50	南隅に口径50・深さ45cmの小ピットあり
33	95	185	107	底面の壁に沿って土器片・礫あり
34	146	134	40	西隅に口径45・深さ35cmの小ピットあり
35	120	110	48	やや袋状を呈する程度、土器は加曾利 E ₂ 式破片
36	118	136	68	P1と切り合う、P1の方が古い
37	120	210	128	東隅に口径30・深さ20cmの小ピットあり、付属墳でP43と結ぶ
38	145	195	72	西隅に口径45・深さ50cmの小ピットあり、底面上に扁平石多い
39	125	145	80	P40と切り合う、新旧関係不明
40	132	160	76	P39と切り合う
41	132	210	58	東西両隅にピットあり、ともに口径50・深さ40cm
42	160	185	53	東西両隅より底部を欠く土器出土
43	170	155	35	東隅に口径40・深さ30cmの小ピットあり、P37と結ぶ

7表 第1次調査掲載土器摘要

No.	出土遺構	No.	出土遺構	No.	出土遺構	No.	出土遺構
1	P. 2	32	P. 3	63	P. 18	94	P. 33
2	P. 6	33	"	64	"	95	"
3	"	34	"	65	P. 20	96	P. 35
4	P. 14	35	P. 4	66	"	97	P. 34
5	"	36	"	67	"	98	P. 35
6	P. 23	37	"	68	P. 22底壁	99	"
7	P. 25	38	P. 5 (P. 25組合)	69	"	100	"
8	P. 33	39	P. 6	70	P. 22	101	"
9	P. 37	40	"	71	"	102	P. 36
10	"	41	"	72	"	103	"
11	P. 42	42	P. 8	73	"	104	P. 37
12	"	43	"	74	"	105	P. 38
13	P. 37	44	"	75	"	106	"
14	"	45	P. 13	76	P. 23	107	P. 39
15	P. 42	46	P. 14	77	"	108	"
16	南北T	47	"	78	"	109	P. 40
17	P. 2	48	"	79	P. 24	110	"
18	P. 6	49	P. 15	80	"	111	P. 41
19	P. 13	50	"	81	P. 25	112	"
20	P. 20	51	P. 16	82	"	113	P. 42
21	P. 21	52	"	83	"	114	"
22	P. 26	53	"	84	"	115	"
23	"	54	"	85	"	116	"
24	P. 42	55	"	86	"	117	"
25	"	56	P. 20	87	"	118	"
26	P. 1	57	P. 17	88	P. 26	119	"
27	"	58	"	89	P. 27	120	P. 43
28	"	59	"	90	P. 33	121	C 2区
29	P. 2	60	"	91	"	122	表土
30	P. 3	61	P. 18	92	"	123	P. 17
31	P. 2	62	"	93	"	124	P. 27

第2次調査

2. 第2次調査

第2次調査も、堀静夫(主任)・常川秀夫(副主任)氏の担当により、昭和47年8月21日～9月4日まで実施された。その概要は、上河内村文化財調査報告書第2冊「梨木平遺跡」(第2次調査概報)に記載されている。その中から〈調査経過〉・〈袋状土壌〉の要項一覧表を転載する。再検の結果、土壌の検出数は41基で、以下に記載する各土壌の名称は本調査の呼称に基いている。本調査においては、土壌等遺構の実測原因が紛失しており、全体図(見つかった)を除いて、土壌実測図は概報から転載した。そのため各土壌の検出状況は記録写真のみが存在する。

調査経過

第1次調査は、昭和46年7月26日より8月11日まで実施し、今回の第2次調査は昭和47年8月21日より9月4日まで行なった。その経過概要を記してみよう。

8月21日(月)：AM9:00現地集合。雨模様のため発掘準備だけにとどめる。PM1:00暇入れ式。続いて作業を開始する。第1次調査地区の直ぐ東側に3×17.5mの南北トレンチ2本を設定する。これをT₁、T₂、北半を夫々T₁-1、T₂-1、南半をT₁-2、T₂-2とする。層位は腐植土(25～30m)、今市軽石層(50cm)、ローム層と続く。T₁において今市軽石層上面で10数個の土壌を確認する。T₂は表土はぎに終る。

8月22日(火)：発掘現場に集合したが雨天のため調査困難。AM11:00中止する。

8月23日(水)：T₁の直ぐ西側に南北3×7mの拡張部を設け、同時にT₂の東側にT₃を設け調査を進める。T₁において土壌数個を確認する。PM、T₄、T₅をT₂の東側に東西方向に設ける。T₄の東区で大きな土壌を確認する。平板測量を開始する。本日から北里大学池田了君が特別参加する。

8月24日(木)：AM、T₁-2区東側に3×6mの拡張部を設ける。T₁とT₂間のセクションをとる。PM、今市軽石層上面の平板測量終了。この上面で多数の土壌があることを知る。この中、P₁、P₂、P₃、P₄を調査。この結果、P₁の底部辺に加曽利E₁式土器2個体出土。1個は把手があるが他の1個体は口縁部がないものである。P₂の底部(ローム)に5～6個の自然石があり。P₃の充填土中に石、土器片(加曽利E₁式)が含まれている。P₄の調査は終る。中村紀男、大金宣亮、川原由典の諸氏ら来訪。

8月25日(金)：前日と同様AM8:30作業開始。P₄の調査を進め、底部に小ピットがあることを知る。P₁₁, P₁₂, P₁₃の発掘を始める。P₁₂は二つの土塊が切り合っているためP₁₁-1, P₁₁-2として整理する。P₁₂の充填土中から大きな土器片出土する。P₁₃には、P₁₄が切り合っていることを知る。P₄, P₅のセクション図を作成する。PM, P₁のセクションベルトを除去し、付属の小ピット3個あることを確かめる。P₄, P₅の調査開始。P₄に小ピット3個確認。先にP₁₁を設けたが、これはP₄と同一であるためP₁₁を図面上から消す。P₁, P₅を調査する。P₅は遺物皆無。P₅内から石皿出土し、炭化物が比較的多い。

手塚村長、猪瀬教育長ら現場視察に来訪。本日から中山由美子さん参加する。

8月26日(土)：朝から雨のため作業を中止する。

8月27日(日)：T₄の調査を開始する。P₂₂, P₂₃, P₂₄, P₂₅の位置を確認する。P₁は極めて浅いものである。P₁₁内から口頸部のない土器が出土する。P₁は深さ90cmで底部となり、そこに付属の小ピット3個検出された。そのうち一つは袋状を呈している。石皿が出土した。P₁は完掘したが付属小ピットはない。PM, P₁₇, P₁₈, P₁₉, P₂₀, P₂₁, P₂₂, P₂₃, P₂₄, P₂₅の調査を開始し、P₁₈, P₁₉, P₂₀, P₂₁は完掘する。またこの4つのピットは袋状を呈さないものである。P₂₂からは多量の遺物出土する。P₂₂の底部からは加曾利E₁式土器片出土。P₂₂の充填土中から石皿が発見される。休日のため宇大生10名応援に来る。

8月28日(月)：AM、昨日に続き土塊を掘る。P₂₂, P₁₇, P₁₈の表土下に大形の加曾利E₁式土器片出土。P₂₂の充填土中から硬玉製大珠が発見される。P₁₈, P₁₇の底部辺には黒色土に炭化物、砂粒が混入していた。P₁₈, P₁₇のセクション図を作る。PM, P₁のセクション図、P₁の平面図をとる。P₁内の土器を掘りあげる。P₁₇には付属の小ピットがある。また彩色された土器片が出土する。

宇大生5名応援に来る。村教委の小林力氏が本日から現地に来ることになった。

8月29日(火)：P₁₁の範囲を知るため東側の農道にトレンチ(T₄)を設ける。この結果、縄文土器片とともに須恵器破片が発見される。かなり攪乱されているようである。P₁₁とP₁₇とP₁₈が夫々切り合っていることを知る。P₁₁のセクション図作成後、セクションベルトを除去する。はじめP₁₁としたものはP₁₁と同一であることを知る。P₁₁の南側に新しいピットが確認されたので、これをP₁₁とする。P₁₁の東にP₁₁が確認される。P₁₁の充填土中から炭化物塊(直径4~5cm)が発見される。P₁の平面図をとる。PM, P₁底部から小ピット発見。中から5~6個の石皿出土する。P₁の西側に新たなピットを確認したので、これをP₁₁-1とし、従来のP₁₁は、P₁₁-2とする。P₁の東壁にある小ピットから磨製石斧出土する。P₁の底部充填土はP₁₈, P₁₇と同様に黒色土に炭化物・砂粒が混入していた。P₁₁, P₁₈, P₁₇, P₁のセクション図を作成する。宇大生5名の応援がある。

8月30日(木) : AM, P₁ と P₂ との間に P₀ を確認する。P₁, P₂ から夫々小ピットを検出する。P₁ を完掘したが明瞭な土壌ではない。新たに P₃ を発見する。P₃ を完掘したが遺物は皆無であった。P₃ の北側にピットを認めたのでこれを P₀ - 2 として、従来のを P₀ - 1 とする。PM, P₁ に 2 個の小ピットを確認する。P₄ は P₃ - 1 と切り合っていることがわかった。P₃ - 1 の底部は砂質土壌であった。P₁ と P₂ とは付属墳によって連なっていることが確認された。本日から全体測量を開始する。

猪瀬教育長、県文化課竹沢謙氏ら来訪。

8月31日(木) : P₀ 内に小ピットを確かめ、P₀ の付属小ピット内底部は砂粒混入のロームである。P₀ の西半部は昨年掘った土壌であるため放棄する。P₂ の小ピットから磨製石斧出土する。今まで掘った地点の南方に新たなトレンチを設定し、これを B 地区とし、従来の地区を A 地区とした。PM, P₄ の北壁から凹石 3 個を出土する。P₀, P₁, P₂, P₃ を完掘し、P₄, P₅, P₆ の平面図をとる。B 地区を掘り始める。層位は腐植土(耕作土)、今市軽土となるが、A 地区よりは耕作土層が深い。表土剥ぎ中、打製石斧、蔽石出土する。

猪瀬教育長、長橋元重氏ら来訪。宇大生 3 名の応援がある。

9月1日(金) : AM, B 地区から P₇, P₈, P₉, P₁₀, P₁₁ の土壌が発見される。また最初 P₀ としたところは土器期の住居跡であることが判明したが、時間の都合でこれを放棄した。P₁, P₂ からはかなり多量の縄文土器片が出土する。また B 地区の南方に C 地区を設け、グリット方式によって発掘を進める。つまり G₁, G₂, G₃, G₄, G₅ として掘る。PM, G₁ に落ちこみのあることを確かめる。A 地区はほぼ全掘される。宇大生 3 名の応援がある。

9月2日(土) : B 地区の P₇, P₈, P₉, P₁₀ を完掘する。P₁₁ は袋状を呈さない。PM, C 地区の G₁ が大きく落ち込んでいるため、拡張して調査範囲をひろげる。また G₁ では住居跡の床部と思われるところに土器の埋込みを発見する。また付近にはかなり多量の土器片があった。住居跡の可能性が高い。

9月3日(日) : C 地区を掘り続ける。この拡張部から伊勢様の粗石が発見される。だが脆土は認められない。この拡張部からは多量の土器片とともに石鏃、打製石斧、蔽石などが出土する。全体測量が終了、B 地区は復元作業をする。また C 地区は 2~3 基の住居跡が重複しているようである。

猪瀬教育長、県教委の橋本、川原、二宮、山崎の諸氏来訪。宇大生 7 名の応援があり、発掘作業はほぼ終了する。

9月4日(月) : A 地区の土器を掘りあげる。袋状土壌群の全体撮影を行なう。同時に B 地区の埋めどしを行なう。C 地区については第 3 次調査に期待し、完掘することなく埋めどし、PM2:00 作業のすべてが終了し発掘現場をあとにする。(常川・瓦井)

第2次調査区の全景

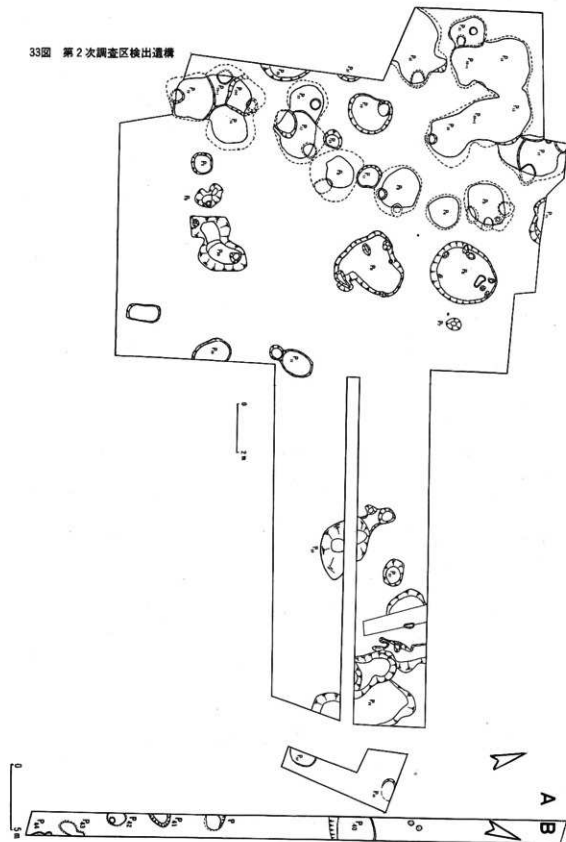


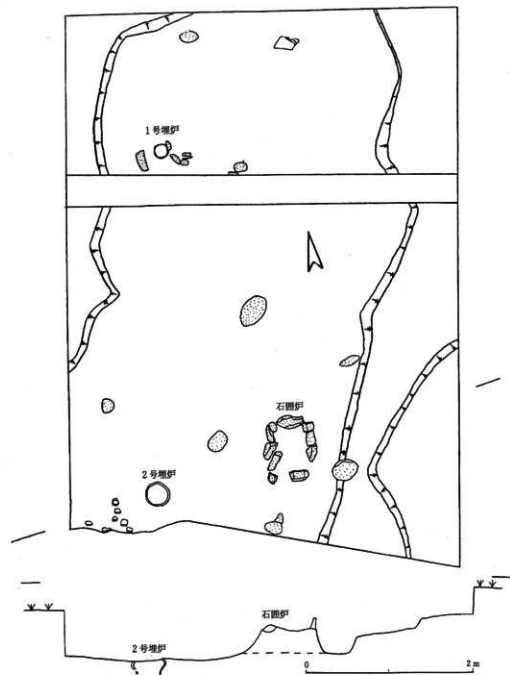
◀2次・A区の調査風景
中央に横に並ぶ土壇は、左からP.3, P.4, P.5。その向う発掘作業をしている箇所が北東隅の土壇集中地区。下辺に一部見える掘り方はP.6の西壁。東側から北東隅を望んだ写真で殆ど半壊ころの様子である。排土の向うに見える民家は遺跡も南北に分断した切通しの西側高台にある。



◀2次・A区の調査風景
手前の実測中の土壇は、重複したP.23(左)とP.17(右)。南から北を望んだ写真で、上辺に作業員が集っている箇所は北東隅のP.13, P.14, P.30-1, 2など6基以上が密集している地区。右辺中央の直線状の掘り方はP.3と切合った中世土壇、右下隅の方形土壇も同様。

33図 第2次調査区検出遺構

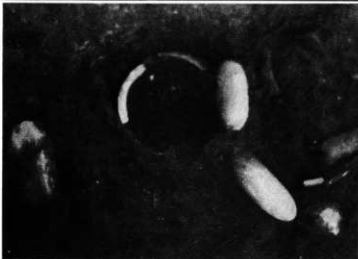




34図 C区 伊址3基の出土状態

3つの炉址（2次・C区）

▼2次・C区石囲炉。



▲2次・C区1号埋壺炉。

▲2次・C区2号埋壺炉。

▼復元個体=148。（左）
とC区出土破片=139。（右）。



148



139

C区検出の3基の炉址

C区は、台地南縁寄り地点で、第4次調査区の土壌群集地点が東隣りにある。ここからは3基の炉址を検出し、明らかに重複する住居址が存在したわけだが炉址のみ確認に終り住居址のプランは不明となっている。

石囲炉 「60×80cmの長方形を呈する（略）、河原石10余個で組まれたものであるが、今は10個程しか残っていない」。写真では楕円にみえる。北辺は大きい扁平礫を外傾させる（焚き口）、側石は直立している。

1号埋壺炉 長方形とみられる石囲炉の内側一方に接して土器を埋設したもの。現物不明。大木8b式相当期の炉には県内で類例がある。

2号埋壺炉 石囲炉の西方約2m離れ、一段低く埋設されていたもの。両者とも黒土中にあり先後不明という。個体148は加曾利Ⅱ古段階。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 4	123×120	146×140	77	V期	土器=159, 土器片僅少, 礫10数個 石器=般石1, 磨石1点	
P. 5	161×128	225×178	90	Ⅲ期	土器=129・160~164 石器=磨製石斧・磨石各1, 凹石2点	子ビット3つあり=㊸㊹㊺

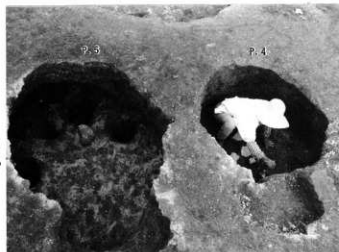


P. 4は、「充填土硬」く填底（ルーム）に「礫10数個」が混入。

P. 5は、充填土に「多量の炭化物」が混入。子ビット3をもつ。



▲ 2次・P. 4
填底に礫がある。
▶ 2次・P. 4 (右),
P. 5 (左)。



159



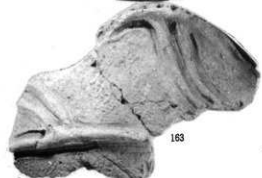
129



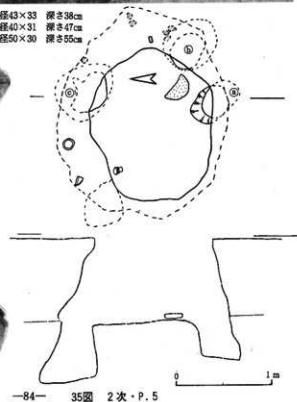
㊸ 口径43×33 深さ38cm
㊹ 口径40×31 深さ47cm
㊺ 口径50×30 深さ55cm



161



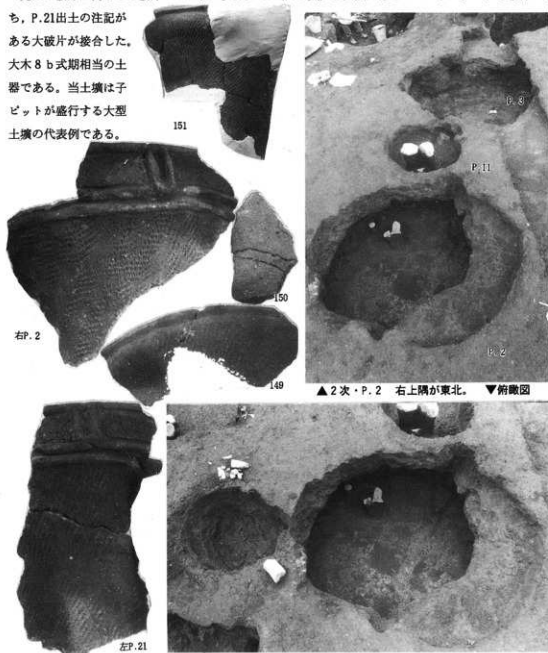
163



—84— 35圖 2次・P. 5

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 2	175×133	246×202	90	Ⅳ期	土器=125・126・149～151(126は87頁に) 石器=敵石1点	袋状が良好 子ビットあり

P. 2は、墳体上部のオーバーハングが良存する典型的な袋状土壌で、墳底も2 m以上ある大型である。墳底南壁ぎわに子ビットが1つある。開口部東側部分は掘削をうけ大きく抉れている。写真の墳底浮きで見える破片が掲示した破片のいづれか。125には〈P. 2底〉と注記があるのでこれか。これら破片のうち、P. 21出土の注記がある大破片が接合した。大木8 b 式期相当の土器である。当土壌は子ビットが盛行する大型土壌の代表例である。

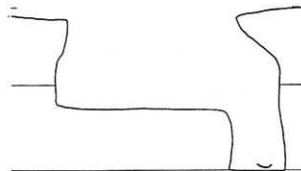
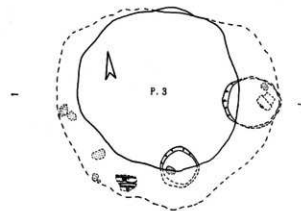
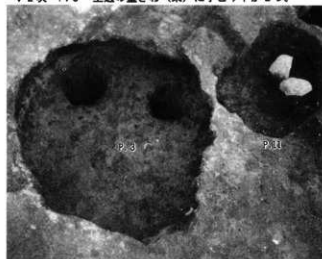


▲ 2次・P. 2 右上隅が東北。▼ 俯瞰図

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 3	170×165	230×205	95	Ⅲ期	土器=127・128・152~158 石器=打製石斧1・磨製石斧1点	子ビット2つあり

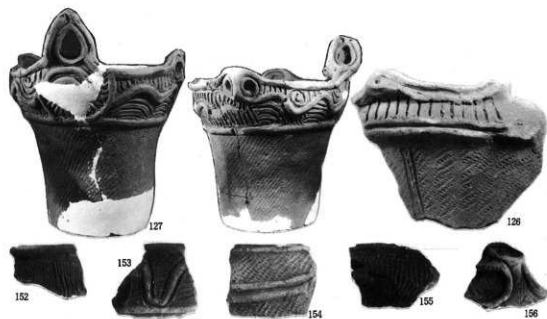
P. 3は、他の土壇とは重複しないが南から中世の長方形土壇に切られている。壁体は北側を除きオーバーハングして袋状の原形を止める。「充填土は黒色で硬く、底面には砂質土壌が認められた。(略)底面付近には炭化物の混入が著しく、石鏝も出土」、8/29「東壁にある小ビットから磨製石斧出土」。土器127は「底面直上」から出土し、P. 23出土破片と接合した。他に、P. 5出土破片、同じく凹石破片がそれぞれ当土壇出土の破片と接合した。127・128は土壇共伴だ。

▼2次・P. 3 上辺の壁ぎわ(東)に子ビットが2つ。



36図 2次・P. 3

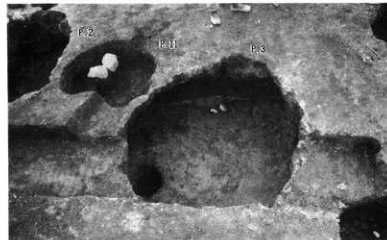




◀2次・P.3 西側からみた先掘状態。奥手の墳底盤ぎわに遺物がみえる。



◀2次・P.3 前掘図。南北軸の中世長方形土壇が開口面を切断している。右手が北。左手墳底の子ビットは兩盤ぎわのもの（小さい方）。その口部の近傍＝兩盤のきわに、土器破片＝128がみえる。墳底盤ぎわで出土した土壇伴出の最も確度が高い遺物である。



※写真の土器のうち128は2次・P.2子ビット①の出土。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 6	279×237	244×203	30	N期	土器=133・165・166 石器=凹石1点	原形は袋状らしい

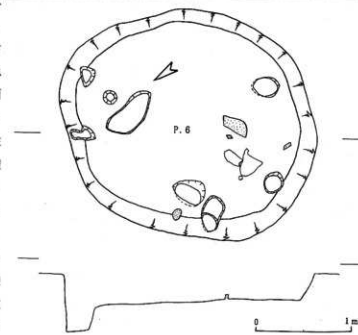
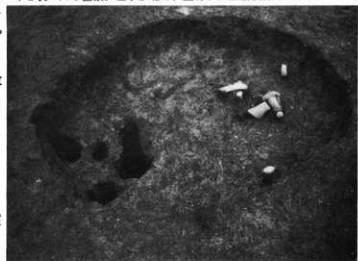
P. 6は、A区北東隅で見つかった。墳底のみが遺存、墳体は損壊して消失している。底径2m以上の大型土壇であるのに袋状の原形が失われているのは、当土壇が崩落しやすい今市層中に墳体をもつ浅い掘り方しか持たなかったためである。典型的な上狭下広の形状を呈し、その後の耕作等で削平されたものの、墳底東壁ぎわの4つの小穴は、

▼2次・P. 6全景、左手が北で、壁寄りに土器個体がある。

8/25「付属の小ピット3個あることを確かめる」とあるが、掘り方や位置関係からみて子ピットではなく後時の攪乱であろう。子ピットの数も形もそれぞれ不自然だ。西壁寄り2個が寄りついて出土した土器は、133は大木8b式期、他は底部で、周辺の礫共ども投棄されたもの。

「土壇内充填土層は七本板軽石、今市軽石を非常に多く混入した土質の軟い茶褐色土層である」という。この状況から著しい壁体崩落、踏みこわしなどの要因を推測できるが、混土の状況によっては埋戻しも考えられる。いずれにしても埋積が急速に進んだものと思われる。「底面南、南西、西、北隅にある小ピットは、口径20~25cm、深さ40cm程の柱穴状を呈するものであり、他の土壇とは異ったものがわかれる」と、上層をもつ構造体を予想する記述もあるが、恐らくそれはあたるまい。

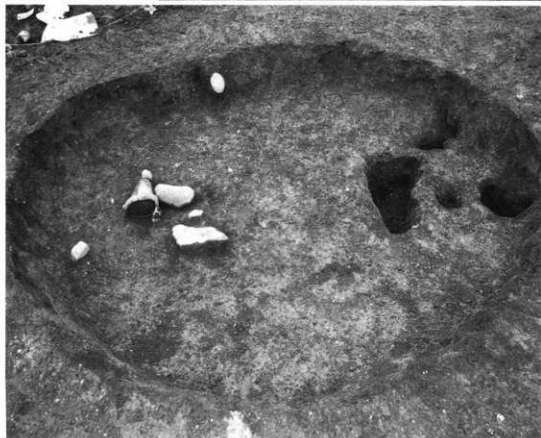
土器133は、円盤状の頂部から弓なり貼り紐をつけた把手1と籐状突起3とを対応させ、器面全体に縄文だけを施したもの。口頸、体部の条痕が逆になる。底部外周にケズリ。



37図 2次・P. 6

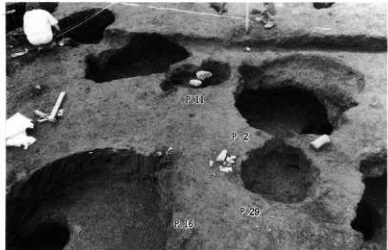


▼2次・P.6 土器=133と底部體体の出土状態。図りに跡が見える。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P. 8	270×220	240×210	30	不明	石器=磨石 1点	不整形、子ビット5つあり
P.10	202×138	140×70	33	不明	石器=石鏃 1点	子ビットあり
P.11	110×95	95×82	—	不明		P. 8と重複

P. 8はA区中央の東寄りにあり、大型土塊のP. 6から中心約4mほど南に離れた位置にある。実測図・状況写真ともない。概報によると磨石1点が出土、取納土器片等はない。従って時期不明である。8/25に発掘を始め子ビット3を確認したという。全体図でみると円形を呈さず「形状が不規則」な上、30cmの深さ



しかない。これらの状況から ▲▶ 2次・P.11他、果して中期所産の袋状土塊かどうか疑念がある。子ビットが直線的な壁に沿って3つが点在しているのも、その感を深くさせる。

一方、P.11の記載には、「P. 8と切り合う」から進んで、8/25に発掘を始めたが「P.11はP. 8と同一であるためP.11を図面上から消す」とあるが、全体図にも概報の土塊一覧表にもP.11は歴然と存在している。そのP.11の位置は、P. 2とP. 3の中間で、右の二葉の状況写真に見える小型土塊がそれである。墳底に礫2点がある。このP.11は後日に新しく命名したものか。

P.10は、A区南寄りにある。実測図・状況写真ともない。全体図では、二つの穴が重複しており、東側の穴に(P.10)の表示がある。「底面北側に小ビットあり」という。出土遺物は石鏃1点のみ。土器等取納はない。掘り方は不整で浅く墳底の形状も同様。中期の土塊かどうか。



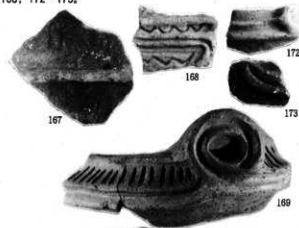
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.12	—	215×200	112		土器=130・167~175 石器=石鏃・打斧各1, 敲石・磨石各2点	4基の土塊と重 複, 子ピットあり

P.12は、A区北縁の辺中央あたりに位置する。実測図・状況写真ともない。全体図によると、P.13など6基以上の土塊が密集重複する地区の北隣にあり、P.12自体も「4ヶの土塊と切り合っている」状態であった。発掘中に閉口部は崩壊してしまい計画不可。結局、墳底の輪郭だけを確認できた。8/25「P.12は二つの土塊が切り合っているためP.12-1, P.12-2として整理する」とあるが、遺物の収納は〈P.12〉として扱い取り分けしていない。従って、遺物は少なくとも2基以上の土塊出土分が混在していると思われる。9/2収納分は〈P.12底〉とあり、167・168・172~175がそれに当たる。確認された墳底に最も係わりの深い遺物といえようか。これらによりP.12をⅢ期相当の時期に位置づけした。

130は破片を接合して得た深鉢形土器の胴部で、器面は黒色を呈し焼成良好。懸垂沈線で四単位に縦割し、それぞれの単位は中央の沈線を挟んで2条の矢羽根状沈線を施し器面全体を充満する。県域内にはほとんど類例を見ない土器で、編年上の位置づけも未定である。上記の出土状態から、この土器の伴出関係を確定することができない。130と混在していた破片では、169・170などの大木8b式対比類土器が最も新しく、磨消縄文を伴う加曾利EⅡは出土していない。130は、加曾利EⅡ式に位置づけすべき土器かと思われるが目下のところ遺構伴出の類例を欠いている。物的な存在とし資料揭示に止める。



▼2次・P.12出土の土器。130は接合復元。167~175のうち、墳底から出土したのが167・168, 172~175。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.13	235×160	202×145	80	I期	土器=131・132・176~184, 礫10数個 石器=打製石斧・磨製石斧各1, 敲石3点	2基の土壇と重複

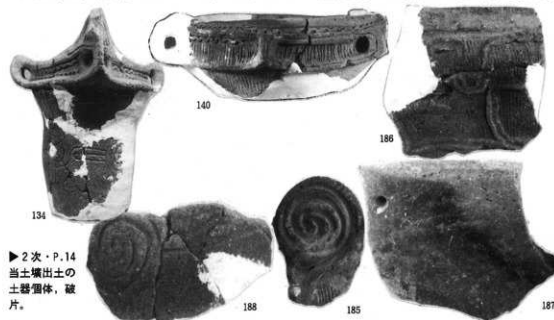
P.13は、A区北西隅の密集重複土壇群の1つで、P.14・30-2と切り合う。実測図・状況写真はなし。「底面近くに礫10数ヶあり」。132・171が伴出と見られる。

▶ 2次・P.13土器132の出土状態。次頁掲載の破片176~184も当土壇の出土。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.14	105×86	225×221	85	I期	土器=134・140・185~188 石器=打製石斧1点, 土製耳飾1点	2基の土壇と重複

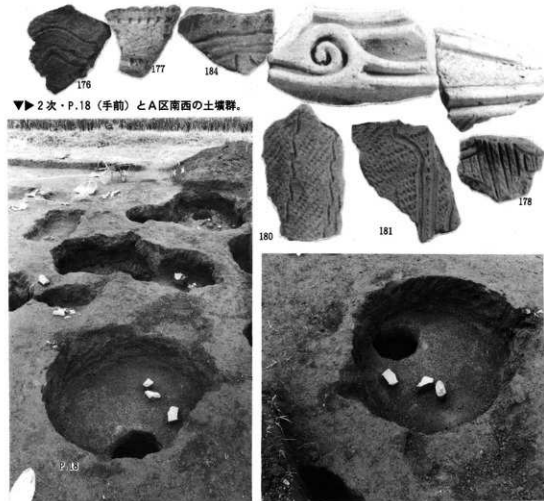
P.14は、A区北西隅にP.30-1・2, P.31, P.13などと密集重複した土壇群の1つ、104頁に後続記述。



▶ 2次・P.14当土壇出土の土器器体、破片。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.20 -1	220?	100?	70	不明	砥石1点 S. 47・8・27付 (P.20) 小袋1つ分	重複
P.20 2	200×100?	100×50?	45	不明		袋状をなさない
P.22	110×70	70×60	30	不明		
P.24	200	140	43	不明	石器=硬玉大珠1点・石皿破片	数基の土壇と重複
P.26	—	—	60	不明		重複
P.27	—	—	43	不明		完掘せず・袋状か

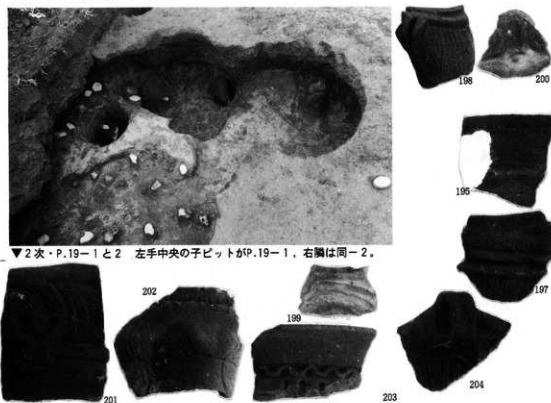
P.20, P.22, P.24はA区西に延びる3m幅の発掘区で見つかる。P.20は重複し、南側が1・北側が2。
P.22は小型で「口部は楕円形」。P.24は「数個の土壇と重複」, 「範囲を知るため東側の農道にトレンチ
M」を発掘し須恵器片が出土「かなり攪乱」という。P.18は北壁に子ビット, 「はじめP.34」の扱い。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.19-1	—	—	76	Ⅲ期	土器=105~109 (土器・石器は、P.19-1・2の両者と区別なし) 石器=打斧・礫石・磨石各1点	3基の土壇と重複
P.19-2	—	—	130	Ⅲ期	土器=200~204 (子ビット内)	2基の土壇と重複 子ビットあり

P.19-1は、大型の土壇P.39の北側にあつて重複し、これより墳底が高い。両者とも投票碑が墳底に散在しており、その状態からはP.39がP.19-1をこわしているように見える。西壁はオーバーハングし袋状の名残りを止めるが、それから推定して中型の土壇か。西壁寄りに子ビット=口径約60cmがあるが壁ぎわではない。8/27 P.19として発掘を始め、8/30「P.19の北側にビットを認めたので、これをP.19-2とし従来のものをP.19-1とする」、8/31「P.19内に小ビットを確かめ」完掘となる。収納遺物は、8/27~31まで小袋5つ分あるがP.19-1と2との分離はない。完掘した8/31に見つかった子ビットはP.19-2のものであろうか、表記は「8.31 P.19内北ビット」とあり、その土器が200~204。掲載した土器は両者の遺物が混在しているわけで、200~204はP.19-2のものだと判断しておきたい。西壁ぎわの礫の在り方は、土壇築造後のさほど埋没が進んでいない時期に一括投票が行われたことを示している。出土土器は、阿玉台・加曾利EⅠ式だが、197・200などから本遺跡Ⅲ期=加曾利EⅠ式(古)段階に対比した。(P.19)出土土器は、19-1・2とP.16・P.39との重複により混在要素が大きい。

P.19-2は、重複土壇群の中で最も墳底が深く、東隣するP.16の墳底をも切り込んでいる。北壁を挟



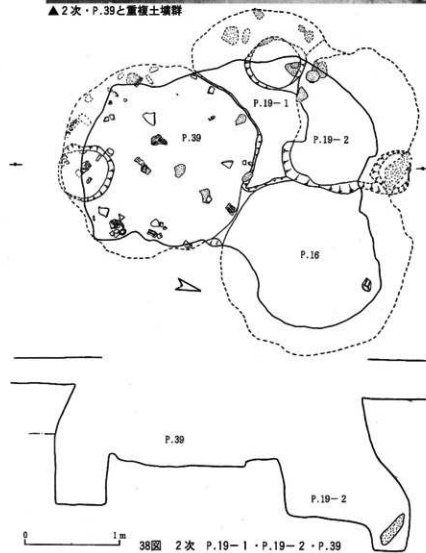
▼2次・P.19-1と2 左手中央の子ビットがP.19-1、右隣は同-2。

って子ビット=口径42・深さ25cmを設置している。その上部に長大な河床礫が入っており投棄の様相を示す。北壁はオーバーハングがよく遺存し袋状の原形を止めている。前述の200などの破片が子ビット中から出土したと見られ、時期判定の資料とした。連続的な更新がもたらした重複だ。



▲ 2次・P.39と重複土壌群

中央がP.39、その右上にP.19-1と隣接するP.19-2。重複のため墳体上半は崩壊し墳底の輪郭だけが確認される。P.19-1の子ビットには周縁と内部に礫が点在しており、P.19-2の子ビット内部にも長大な礫が入っている。土壌断絶後の投棄を示している。墳底は田原ローム火山反層まで掘り込まれている。左辺下部に張り出して見える今市層は赤褐色なので黒く、墳底の火山層は黄褐色なので白く写っている。



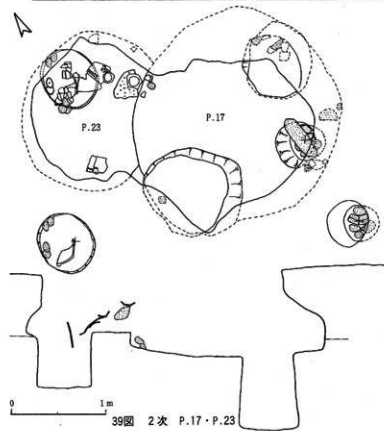
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.23	140×120	165×145	60	Ⅲ期	土器=136・144・205 石器=石鏃・打製石斧・磨製石斧・磨石 各1点	重複、子ピットあり

P.23は、東隣のP.17と重複し「土壌の切り具合とか土壌内充填土などからみて、P.23はP.17より新しい構築」だという。横底北壁に子ピット＝口径65×56・深さ59cmがあり、中部に「土器片が混入」して

▶2次・P.23 重複する2基のうち左手（西）の土壌。北壁ぎわに子ピットがあり、上面に土器個体=136、大小の礫などがのってあり投棄の状態を示す。



いたという。横底浮きで、土器個体=136・石鏃破片・礫など出土し投棄の状況を示している。他に石器類の出土も多かった。136は大型深鉢の胴部で、十字を伴う懸垂文を特徴とし、大木8b式対比期まで出現する。144は2本平行の貼紐を特徴とする土器で、これらによりⅢ期に位置づけた。

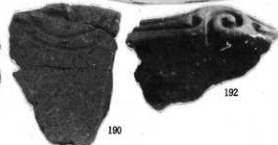
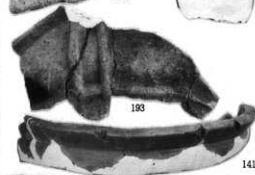
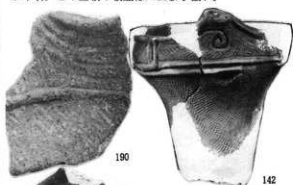


名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.17	170×150	220×215	90	■期	土器=141・142・189~194 石器=磨製石斧・蔽石6・磨石・石皿各1	重複、底面に炭化物多し

P.17は、掘り方が大きく袋状の形状を止める土塚で、墳底東壁に2つ、南西壁ぎわにも子ピットと見られる浅い掘り方をも本遺跡盛時の代表的な在り方を示す。北隣のP.23と重複する。北東に隣接してP.2があるが、8/30「P.2と付属墳により連っていることが確認された」とある。墳底近くの堆土には「黒色土に炭化物・砂粒が混入していた」「小ピット内の底部は砂質混入ロームでこの中から磨製石斧出土」という。墳底は田原ローム火山灰層上面にある。出土した土器では、2本平行の貼紐を特徴とする加曽利E1式(古)・〈浄法寺タイプ〉など。子ピットは、東壁の大=口径71×56・深さ55cm、小=口径48×44・深さ55cm(上部に礫・土器片、下部に蔽石・凹石)、西壁の穴=106×91・深さ25cm。



◀2次・P.17 2基が重複。上方(東)がP.17、下方がP.23。P.17は墳底東壁に2つの子ピットがある。右手の方は黒土が詰って掘り方が見え、上面に長大な礫がのっている。西壁寄りにも浅い掘り方があるが子ピットかどうか不明。この土塚の墳底はP.23より低い。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.30-1	133×102	180×140	72	N期	土器=206~210 石器=石槍・打製石斧・敵石・磨石各1	3基の土壇と重複
P.30-2	(重複のため計測不可)			N期	(土器・石器は両者と区別なし,他に硯10数個)	

P.30-1は、北隣のP.14、西隣のP.31と重複する土壇P.30として発掘された。8/28から掘り始め、8/29にセクション図作成と進み、8/30に至って、この土壇から少し東へ離れて新たな土壇が見つかったので名称をつけ変えた。これまでのP.30をP.30-1とし、新たな土壇をP.30-2としたのである。収納遺物は「P.30」の扱いになっているが、8/30までの遺物はP.30-1出土と見られる。下の2枚の出土状態写真は、P.30-1に伴うものと思われる。渦巻文モチーフを特徴とし、大木8b式併行期の土器である。「硯が10数ヶ出土」、8/30「底部は砂質土壇であった」など記述はあるが全景写真は無い。

P.30-2は、「いくつかの土壇と切り合っているため」計測できなかったといい、概要は不詳。前記の状況から、8/31「P.30」出土扱いの小袋から細片を見ると、P.30-1と同時期とみられる。この土壇は極端な例だが、本遺跡では壁体が崩れやすい今市層の中に掘り込むので重複状態不明が少なくない。



▼2次P.30 土器206の出土状態。



▼2次P.30 土器207・210の出土状態。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.31	140×135	150×140	42	Ⅲ期	土器=147 石器=磨製石斧1・磨石1点	重複 子ビット2あり

P.31は、A区北西隅の土壇6基が密集重複するうちの1基。壇底中央と南東壁ぎわと2つの子ビットがある。東側のP.30-1と重複する。全景写真では、右辺に見えるセクションベルトに沿って長方形の



掘り方があり、これに壇体南辺を切断されたように見える。8/28「表土下に大形の加曽利E1式土器片出土」とあり。下の147の出土状態がそれらしい。182は阿玉台式で注記に「P.31底」とある。子ビットを伴うのはⅢ期以降が一般的なので、147（大木8a式期）の時期に比定した。

▼2次P.31 壇底の遺物。

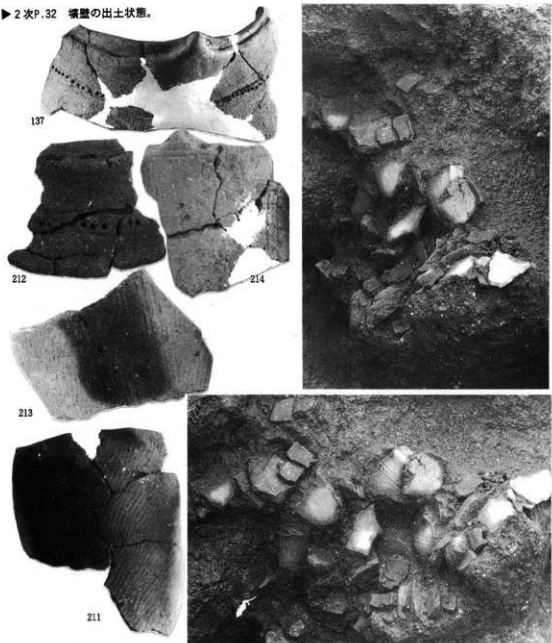
▲2次P.31 西側から。北壁寄に竊3個がかたまり子ビットの真口にかかっている。鼻手右にも竊1個が未掘の子ビットにのっている。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.32	280×230	300×250	95	N期	土器=137・211~214	不整形の大きな土塊

P.32は、A区西辺にかかって見つかった。実測図・全景写真ともない。「東側に2個の袋状土塊あり」といい、全体図にみえる当土塊の東側部分の「不整形」の張り出しは子ピットを伴う1基と他の1基との計3基の重複と知れる。8/28「表土下に大形の加曾利E 1片出土」が137（大8b）の出土状態。

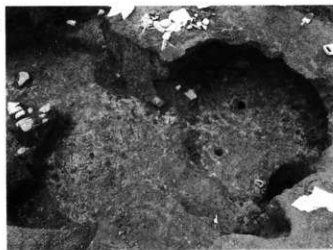
▶ 2次P.32 墳壁の出土状態。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.34	170×155	200×200	80	Ⅲ期	土器=145・215・216	重複 子ビットあり

P.34は、A区北西隅の土壌6基が密集重複する中の1基で、北隣するP.30-2と重複している。写真で見ると西壁はオーバーハングし袋状の名残りを止めている。重複するP.30-2は一時期新しいⅣ期の所産だが、横底は当土壌の方が深い。横底南壁に子ビットが1つあり、その開口部から少し東へ離れた位置（横底南壁の壁ぎわ）に土器215が出土している。概報によると、調査後半の8/29、「P.12の両側に新しいビットが確認されたのでこれをP.34とする」とあり、この時までP.34として掘っていた土壌がP.12と一体化したのでナンバーをつけかえたのだという。翌8/30に「P.34はP.30-1と切合っていることがわかった」とあるが、切合っているのはP.30-2である。P.30-1はそれより少し西へ離れて存在しており、新にP.34のナンバーをつけて掘り始めたところこの土壌にも重複した土壌があったのでそれをP.30-2と銘うったのかも知れない。因にP.30-1・2については遺物の取りわけがなく、全部「P.30」で収納している。土器145は口縁部の把手と彫刻的な複弧沈線を口頸部に充張した〈浄土寺タイプ〉に属する。215は2本平行の貼紐で意匠文を施すもの。加曾利EⅠ式（古）で、大木8a式の新しい段階に対比される。2本平行の貼紐は該期に盛行する特徴的な施文で、本遺跡でも類例が多い。

▶ 2次P.34 右手の土壌がそれ。子ビット（南壁）が見える。左手の土壌は重複するP.30-2。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.39	170×150	215×200	87	Ⅱ期	土器=143・146・218~235	2基の土壇と重複、子ビット

P.39は、南隣のP.16と東隣のP.19-1との2基と重複していた。南側は若干オーバーハングし袋状の名残りを止める。子ビット=口径約55・深さ約50cmで、墳底は田原ローム火山灰層に掘り込まれている。土器破片、礫などが投棄され墳底に浮きの状態で散乱している。出土状態の写真のうち、左上隅に232、その下に223、中央に229、左下隅で上方に233・下方に230。その他の破片も掲示した破片写真に含まれているものがあるようだ。実測図(95頁の38図)によると、右辺中央に225、右上隅に217がある。これら破片のうち、143は別地点のP.17出土破片と接合した。

P.39は、掘り込みのしっかりした、子ビットを伴う時期の土壇であり、梨木平遺跡の盛時における土壇の典型例といえる。この土壇と重複するP.16、P.19-2及1はⅡ期の所産で一時期遅い。連続的な更新によってこのような密集状態を生じたのだろう。



掲示した土器は同時期と見られる。218・219・221は口縁部を彫刻的な複弧沈線で充填する〈浄法寺タイプ〉。226・227・143など2本平行の渦巻文モチーフを口縁部に施文する土器も大木8 a 式古比定。

▼2次P.39

墳底での遺物出土状態。奥手に子ビット。画面に見える土器片の写真をそれに近い位置に配してある。



名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.15	140×102	124×90	26	不明		楕円状で浅い土壇
P.16	135×135	205×195	95	Ⅲ期？	土器＝135（遺物僅少） 石器＝磨製石斧1点・磨石1点	3基の土壇と重複

P.15は、B区東限の中央部で見つかった。実測図も写真もなく、収納遺物もない。全体図で見ると、北東に長軸をもつ楕円形を呈し、浅い。南接して小穴がある。

P.16は、B区南西隅で土壇4基が重複していた中の1つ。実測図・写真はP.19・P.39の頁（95頁、103頁）を参照。

調査状況を概観から抜き写しする。

「土壇内充填土は黒色土で七本桜軽石、今市軽石が混入し、炭化物の混入割合は多くない。また土壇底面に近い中央部には、P.3と同様に砂質土が認められたが、(略)底面に敷いたものではないようである。砂質土壇の検出度合からみて流入されたものと思われる。(略)付属の小ピットはない」

重複する4基の土壇＝P.16、P.19-1、P.19-2、P.39の新旧関係については、「結局構築の順序としては、P.19-2、P.16、P.19-1、P.39ということになる。だが出土した土器はすべて加曾利E1式であり、土器文様からみた新旧は判別困難であるから、そこには甚だしい時間的差異はない(略)」

P.14について（92頁の後続記述）

P.14が重複して検出された状況を示す実測図や写真はない。計測値から、深さ95・底径220cmほどの大型で握り込みのしっかりした土壇であったらしい。全体図には子ピットらしい表示が見られるが、概観の記述からはその形跡はないと思われる。8/29 P.13の西側に新たなピットを確認したので、これをP.14-1とし、従来のP.14はP.14-2とする」という。しかし、全体図にはP.14の1、2の区別はなく遺物収納も同様である。詳細は不明だがP.14自体が2基の重複であったことは分かる。遺物収納は8/27～9/4で、出土遺物は頭記の土壇の一括扱いとしておく。P.14は、南隣のP.30-1、東隣のP.13と切り合い、本体自体の重複と合せて複雑した状況にあるので遺物の混在は免れない。

土器134は、P.14壇底出土の阿玉台式末葉比定で、P.5出土破片と接合。土器140は深鉢上半部だけが遺存するが、これもP.5出土破片と接合した。P.5は、P.14から中心で約6～7m東へ離れて存在するⅢ期対比の土壇であるが、P.5遺物の収納に誤りがないとすれば辻褃が合わない出土状態ではある。

土器185～187のうち、Ⅲ期比定の186を除いて阿玉台式末葉で、P.14はⅠ期所産と見ておきたい。他に、滑車形の土製耳栓、凹石3点（北壁から）などが出土した。

名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.35	—	—	70	不明		未発掘、他の1基と重複
P.36	90×50	85×40	45	不明	石器=石鏃1点、他に礫4個	不整形の小さい土塊
P.37	110×100	105×95	54	Ⅱ期?	土器=217	原形は袋状らしい
P.38	160×120	150×100	18	不明		楕円形の浅い土塊
P.40	「最初P.40としたところは土師期の住居跡であることが判明したが、時間の都合でこれを放棄した(9/1)」				土器=土師甕(木葉痕)・土師環(糸切底)=下の写真	「」の記載は報告書による。
P.41	200×140	160×110	65	Ⅲ期	土器=236	袋状を屋さない

この頁の土塊は、A区とB区の縁辺で検出された。個々の実測図・写真ともない。下図・48図参照。

P.35 A区北限の区画線にかかった土塊。遺物収納もなく、他の1基との重複を確認しただけで放棄されたのであろう。南隣して土塊の密集区があるので、これらの連続的な構築に関連しているのか。

P.36 A区東側拡張区のもの東に飛び離れた小調査区で見つかった2基のうちの1基。「不整形の小さい土塊」とあるが、全掘はしなかったのであろう。石鏃など出土遺物により、他と同様に中期所産か。

P.37 P.36の南隣に離れて存在。東側半分だけを発掘したのか。「もとは袋状を呈していたらしい」という。4片ほどの破片を収納、傷んでいる。217は渦巻文モチーフのデコレーション。大木8b併行。

P.38 A区東限の区画線にかかった土塊。西側半分だけを発掘したのか。「楕円形を呈する浅い土塊である」という。20cmに満たない深さで、全体図でみる限り不整形。出土遺物もない土塊かどうか。

P.40 表の記述のように、実は土塊でなく土師期の住居跡である。「放棄した」とあり住居跡のプラン、出土状態などは不詳である。収納された遺物は、下の写真で左端の甕とその右隣の環。甕は器面が粗くケズリ痕を残す。環は糸切底で、内面に黒色処理がなされている。奈良時代以降の土師器と見られる。A区には、細長い中世の方形土塊が、第4次調査区には断面V字状の空堀が、それぞれ発掘されている。当土師期住居跡は、これら中世城館跡関連遺構に先行する時代の存在を示す点で注意される。

P.41 B区南半部で5基ほど並んで見つかった中期土塊の1つ。東側半分だけを発掘したのであろう。収納遺物は僅少で、土器片236iは渦巻文モチーフの口縁部文様。大木8b併行の新しい段階と見る。

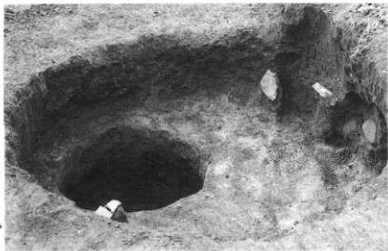
▼2次P.40出土の土師器(左端、下段中央)、236=2次・P.41、243・244=2次・P.45。



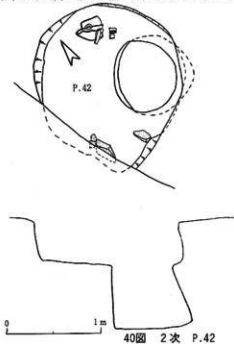
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.42	155×150	155×150	48	N期	土器=237・238 石器=打製石斧1点	袋状の形状、子 ビットあり

P.42は、B区南半で見つかった。掘り上がりの形状はほぼ円筒状で南壁の一部がオーバーハンドしており、袋状の原形が遺存している。調査時の深さは50cmほどで、「もとは袋状を呈した土壇であった」ものの壁体崩落が著しい。実測図平面の下側に斜めに引かれた線はB区トレンチの西縁。墳底の東壁ぎわに子ビット＝口径約80・深さ約80cmがあり、外側へやや張り出している。図の墳底にある土器片は実物の確認ができなかった。西壁に礎が倒立して貼りついており、土壇埋設途上の投棄を示している。

土器237は墳底から15cm浮きで、土器238も墳底から出土した。238は大型深鉢の破片で条線地文に、平行沈線で唐草文に類する横位展開のモチーフを描く。平行沈線の間は不完全ながら磨消が行われている。曾利式系罽の土器であろう。大木8b式対比だが、その新しい段階と考える。



▲2次P.42 左手の子ビットがある側が東。西壁に礎がはりついている。



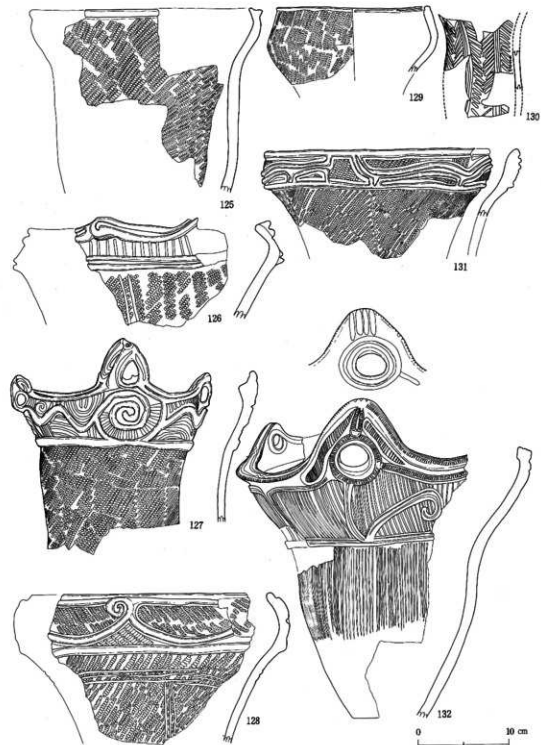
名称	口径	底径	深さ	時期	出土遺物	補足
P.43	150×100	143×93	40	Ⅳ期	土器=138・239~242	袋状の形状らしい、重複

P.43は、B区南端にあった。周縁にも土壌が多く、この南側は第4次調査で土壌の密集が確認された場所である。B区はトレンチで、発掘範囲が狭いためその一帯での状況は不詳であるが、更に北側に離れて発掘されたA区の密集状態との関連で見ると、A区からB区、そして第4次調査区とそれに隣接するC区までひと続きの土壌群在地区が存在すると考えてよからう。この土壌密集区の東側部分は局所的な高みで台地の中央部に当たる。その高みの西側端に南北の空堀跡、B区の北半で土師期住居址を検出。

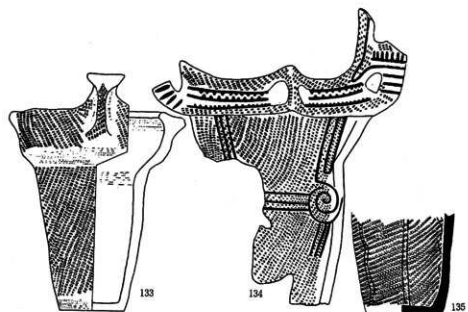
▶2次P.43 墳内上部からの出土遺物。中央下辺の土器は241。左下隅は北で、他の土器と重複している。



P.43は浅い土壌で、掘り上げ時には円筒状だが「袋状であつたらしい」という。北側にある他の1基と重複している。出土破片の接合により138を得る。かなり埋没が進んだ状態で破片の投棄が行われたのであろう。掲示した土器片は同時期のもので、いずれも口縁部の渦巻文を伴う横帯区画文によって特徴づけられる一群。239は該期に類例の多い把手。大木8b式に対比される土器である。

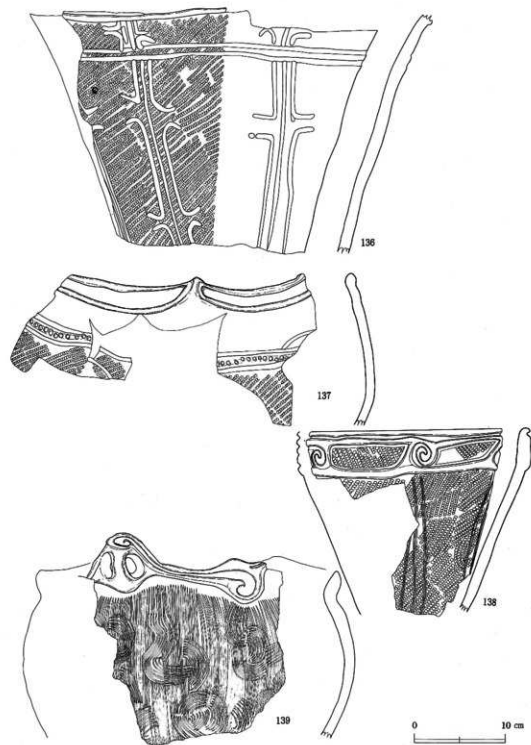


41圖 2次・土器(1) 125=P. 2 126~128=P. 3 129=P. 5 130=P. 1 2 131~132=P. 13

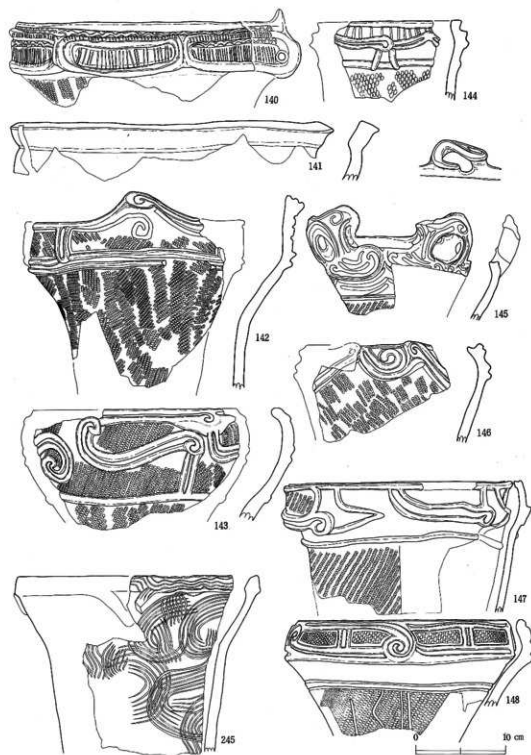


42图 2次·土器(2) 133=P. 6 134=P. 14 135=P. 16

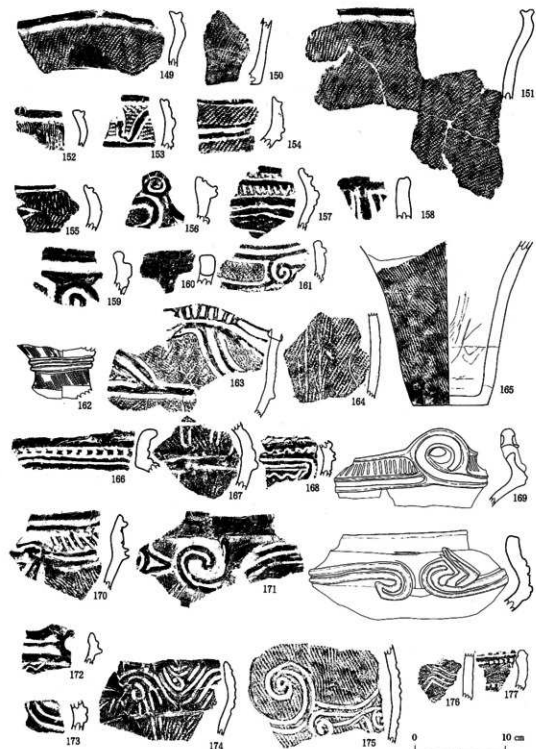
0 1m



438圖 2次・土器(3)
 136=P. 23 137=P. 32 138=P. 43 139=P. 47



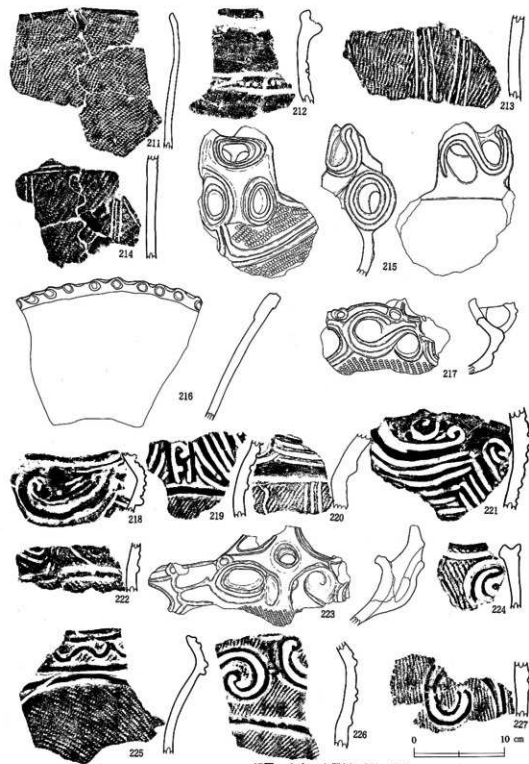
44图 2次・土器(4)
 140=P.14 141~143=P.17 145=P.34 146=P.39
 147=P.31 148=炉体 245=1次・P.18



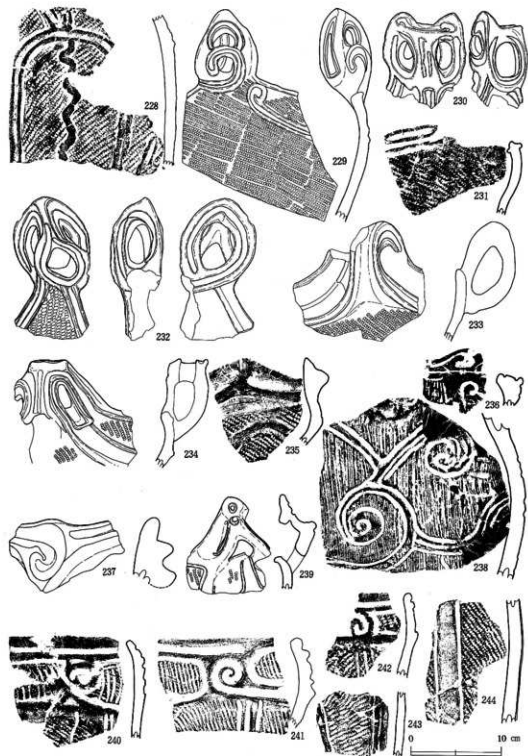
45图 2次・土器(5) 149-177



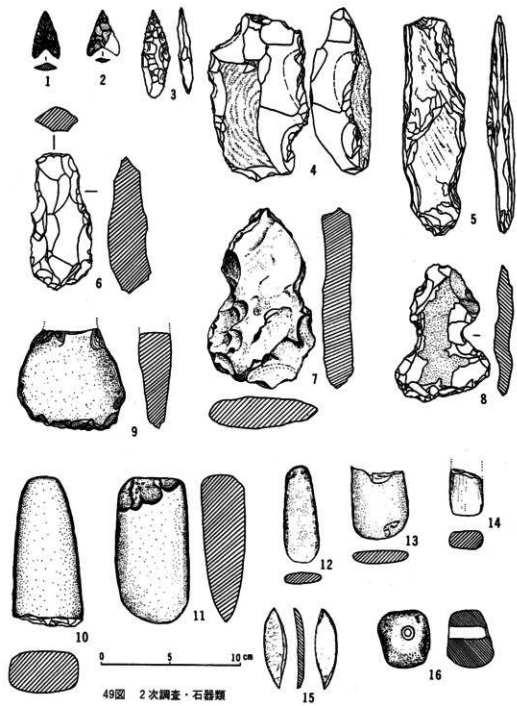
46图 2次・土器(6) 178-210



47图 2次·土器(7) 211—227



488 2次・土器(6) 228-244



49圖 2次調査・石器類

表8 第2次調査検出の袋状土壌概要表

土 番 号	口 径 cm	底 径 cm	深 さ cm	特 記 事 項
1	94×94	72×80	20	石皿1ヶ、礫7ヶ底面にあり。袋状を呈さない。
2	175×133	246×202	90	典型的な袋状土壌。底部に小ビットあり。(蔽石1)
3	170×165	230×205	95	底面の東壁と南壁に小ビットあり。(打弁1・磨弁1)
4	123×120	146×140	77	充填土硬い。礫10数個混入。(蔽石1・磨石1)
5	161×128	225×178	90	底面から蔽石出土。東・北・南の壁近くに小ビットあり。 (磨弁1・磨石1・凹石2)
6	279×237	244×203	30	袋状を呈さないが、もとは呈していたようだ。横転した 土器2ヶ出土。(凹石1)
8	270×220	240×210	30	形状が不規則な土壌である。小ビット5ヶあり。(磨石1)
10	202×138	140×70	33	底面北隅に小ビットあり。(石礫1)
11	110×95	95×82	—	P8と切り合う。調査中にP11はP8と同じものになる。
12	—	215×200	112	4ヶの土塊と切り合っている。調査中口部崩れ不明。 (石礫1・打弁1・蔽石2・磨石2)
13	235×160	202×145	80	P12、P30と切り合う。底面近くに礫10数ヶあり。 (打弁1・磨弁1・蔽石3)
14	105×86	225×221	85	P13、P30-1と切り合う。土製耳飾出土。(打弁1)
15	140×102	124×90	26	浅い土壌で楕円形プランを呈する。
16	135×135	205×195	95	P19-1、P19-2、P39と切り合う。(磨弁1・磨石1)
17	170×150	220×215	90	P23と切り合う。底面付近に炭化物が多い。蔽石、凹石 などあり。(磨弁1・蔽石6・磨石3)
18	185×150	163×130	50	北隅に小ビットあり。構築時には袋状を呈していたらし い。
19-1	—	—	76	P16、P19-2、P39と切り合う。底面より礫10数ヶ出 土。(打弁1・蔽石1・磨石1)
19-2	—	—	130	P16、P19-1と切り合う。底面北隅に口径42、深さ25 の小ビットあり。

土 壙 号	口 径 cm	底 径 cm	深 さ cm	特 記 事 項
20-1	-	-	70	口径220、底径100cmと思われる。北側でP20-2と切り合う。(蔵石1)
20-2	-	-	45	口径200×100、底径100×50cmと思われる。袋状を呈さない。
21	170×150	140×120	12	袋状を呈さない浅い土壌である。
22	110×70	70×60	30	口部は楕円形を呈する。
23	140×120	165×145	60	P17と切り合う。底面より石皿、礫などが出土。小ビットあり。(石礫1・打斧1・磨斧1・磨石1)
24	200	140	43	硬玉製大珠が出土。P24は数個の土塊と重複している。
26	-	-	60	P23と底面北東隅で切り合うようである。
27	-	-	43	未完掘。袋状を呈すかもしれない。
30-1	133×102	180×140	72	礫が10数ヶ出土。P14、P31、P32などと切り合う。(石礫1・打斧2・蔵石1・磨石1)
30-2	-	-	45	いくつかの土塊と切り合っているため口径、底径など不明。
31	140×135	150×140	42	P30-1と切り合う。底面に小ビット2ヶあり。河原石数ヶ出土。(磨斧1・磨石1)
32	280×230	300×250	95	不整形であるが大きな土塊である。東側に2個の袋状土塊あり。
34	170×155	200×200	80	P30-2と切り合う。底面南壁に小ビットあり。
35	-	-	70	未完掘。このビットはもう一つのビットと切り合っているようだ。
36	90×50	85×40	45	不整形の小さい土塊である。礫4個あり。(石礫1)
37	110×100	105×95	54	もとは袋状を呈していたらしい。
38	160×120	150×100	18	楕円形を呈する浅い土塊である。
39	170×150	215×200	87	P16、P19-1と切り合う。底面に土器片多い。小ビットあり。
41	200×140	160×110	65	袋状を呈さない土塊である。
42	155×150	155×150	48	もとは袋状を呈した土塊であった。小ビットあり。(打斧1)
43	150×100	143×93	40	他のビットと切り合っている。袋状土塊であったらしい。
44	-	-	29	他のビットと切り合っている。未完掘。
45	170×150	140×120	115	袋状土塊であるらしい。(蔵石1)

9表 第2次調査掲載土器摘要

No	出土遺構	No	出土遺構	No	出土遺構	No	出土遺構
125	P. 2底	156	P. 3	187	P. 14	218	P. 39
126	P. 2子ビ①	157	"	188	"	219	"
127	P. 3	158	"	189	P. 17子ビ③	220	"
128	" 底	159	P. 4	190	" 子ビ	221	"
129	P. 5	160	P. 5 ?	191	"	222	"
130	P. 12	161	P. 5底	192	"	223	"
131	P. 13	162	"	193	" 底	224	"
132	" 底	163	"	194	"	225	"
133	P. 6底	164	" 子ビ③	195	P. 19	226	"
134	P. 14底	165	P. 6底	196	"	227	" 底
135	P. 16	166	"	197	"	228	"
136	P. 23	167	P. 12底	198	" 底	229	"
137	P. 32	168	" 底	199	"	230	"
138	P. 43	169	"	200	" 子ビ	231	"
139	C地区	170	"	201	"	232	"
140	P. 14底 (P. 5集合)	171	P. 12	202	"	233	"
141	P. 17	172	" 底	203	"	234	"
142	"	173	"	204	"	235	"
143	P. 39 (P. 17集合)	174	"	205	P. 23	236	P. 41
144	P. 23	175	"	206	P. 30	237	" 底上
145	P. 34	176	P. 13	207	"	238	" 底
146	P. 39	177	"	208	"	239	P. 43
147	P. 31	178	"	209	"	240	"
148	C区炉体	179	"	210	"	241	"
149	P. 2底	180	"	211	P. 32	242	"
150	" 底	181	"	212	"	243	P. 45
151	" 底	182	"	213	"	244	"
152	P. 3	183	"	214	"	245	1次P. 18
153	"	184	"	215	P. 34		
154	"	185	P. 14	216	"		
155	"	186	"	217	P. 37		